医者に治せない病気

重田定義著

医者に治せない病気

重田定義著

序にかえて

私が、医学の道を歩み始めてから五十年になりますが、振り返って見ますと、医学に関する知識や技術は、その間に著しく進歩し、それに伴って、この五十年の間に、日本人の死亡の上位を占める病気も、結核などの感染症から癌などの成人病へと大きく変わり、また、日本人の平均寿命も男性では二十六年、女性では三十一年延び、今や世界一の長寿国になりました。そして今日、医学の進歩は、体外受精や臓器移植さらに遺伝子治療にまで及び、また、私たち自身も、医学情報の普及や健康管理の浸透により、自分の健康についての自覚を強く持つようになりました。私たち人間がこのように病気や健康に、飽くことのないまでの関心を抱く大きな理由は、その根本に死に対する恐れがあるからです。一方、医学の、ますます強まる人間のいのちへの介入によって、私たちは、人間のいのちの尊厳性について改めて真剣に考えざるを得ないようになり、その現れとして、医の倫理や尊厳死の問題が真剣に論議されるようになったのです。

しかし、いかに医学が進歩しても、私たちが健康に留意しても、人間は死を免れることはできません。また、いかに倫理的な規制がなされようと、いかに肉体の死が安らかに迎えられようと、それでいのちの問題、死の問題が解決されることはありません。いのちの問題、死の問題は、単に肉体の健康や、肉体の死の問題にとどまらず、たましいの健康、たましいの死の問題であるからです。この問題の解決は、人間の知恵や力、医学の力では不可能であります。なぜならば、たましいの問題は、人間の知恵の領域に属することではなく、神の領域に属することだからです。そして、たましいの病すなわち罪を癒し、たましいを死から救い出し、変わることのない平安と喜びと永遠のいのちの希望を与えることのできる方は、私たち人間の創造主である義と愛の神であり、また、そのひとり子のイエス・キリストだけであります。

私は学生時代から観念的な信仰を持っておりました。しかし、十三年前に神のあわれみによって心砕かれて生きた信仰が与えられ、はじめて聖書を通して人間に対する神の深い愛のみこころの意味、すなわち、神と人間との正しい関係について、また、人間に与えられているほんとうの生と死の意味について知ることができるようになりました。

私は創設以来今日まで二十年余奉職した東海大学医学部を定年退職いたしましたが、こ

の機会に私が学んで来ました医学、医療の中で神が語られている真理を皆様にお伝えすることが、神によって医学徒とされた私に与えられた責任であると感じ、この本を出版することを決心いたしました。

ここに収められた十二のメッセージは、家庭集会、各地のキリスト集会、講演会で行ったもの、雑誌に掲載されたものの転載などであります。また、最後に、一九九三年二月に行いました退任講演を載せました。お読みになって、聖書の同じ箇所が何度か出てきたり、同じような説明が何度か繰り返されていることに気がつかれると思いますが、このような箇所は、神が私たちに語ってくださっている重要なメッセージでありますから、どうかそのことに心を留めていただき、この本を通して、神の愛と恵みの結晶であるイエス・キリストの救いのみ業を、ご自分のものとしてお受け入れになり、まことの平安と喜びと希望に満たされた人生を歩んでいただきたいと、切にお祈りいたします。

この本を通して、企画から出版に至るすべてを導いてくださった、私たちの造り主である神がご栄光をお受けになりますように心から祈りつつ、序にかえさせていただきます。

最後に、この本の出版について終始協力し、祈ってくれた妻に感謝します。

一九九五年四月　　重田定義

目次

序にかえて……3
一　神のなさるインフォームド・コンセント……9
二　癌の告知と罪の告知……19
三　安楽死と尊厳死を通して死の問題を考える……33
四　臓器移植と永遠のいのちの移植……47
五　もう一つの痛み……59
六　光を見つめると治る病気……73
七　肉の目の色盲と霊の目の色盲……89
八　たましいの健康管理……105
九　環境破壊は人の力では阻止できない……121
十　あばら骨の役割……133

十一　医者に治せない病気……145
十二　ハイテク医療の中の生と死　医の倫理を模索する中で……167
退任講演「若き日に汝の造り主を覚えよ」……179

神のなさるインフォームド・コンセント

私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。

（申命記30・19）

インフォームド・コンセントとは

最近、医療関係者の間で、インフォームド・コンセントという言葉がさかんに使われるようになりました。一言でこの言葉の内容を表現できるようなよい訳語はなく、一応、「医師による説明と患者の納得と同意」と訳されていますが、簡単に言いますと、医師が自分が診療に当たっている患者に、いま罹っている病気と、行おうとしている治療について十分に説明を行い、その説明に患者が納得すれば、患者の同意にもとづいて治療を行うというものです。そのようなことは、当然行われていなければならないはずではないかと、

不思議に思われるでしょうが、その当然のことが、わが国だけではなく、欧米でも意識して行われてはいませんでした。

しかし、十年ほど前から、「自己決定権、すなわち自分の問題は自分で決定する権利がある、という考え方を病気の検査や治療にも取り入れるべきである」という主張がされるようになりました。この考え方によれば、「自分の病気なのだから、まず自分自身が、その病気はどのようなものか、どのような原因で起こったのか、現在の状態はどの程度であるのか、これからどのような経過をたどるのか、どのような検査を受けるのか、それらの検査にはどんな苦痛が伴うのか、また、その病気にはどのような治療法があるのか、それらの治療法の効果はどうなのか、苦痛がどの程度あるのか、などについて、十分に理解したうえで、自分自身の責任で方針を決定する」ことになります。そこで、患者が病気について自己決定を行うためには、それに必要な情報が与えられなければならない、ということから、インフォームド・コンセントが医療の場で行われるようになったのです。

欧米では、もし患者にインフォームド・コンセントなしに医療が加えられた場合には、その医師は賠償の責任を負わなければならないということです。しかし、わが国では、インフォームド・コンセントについて、まだ医師にも患者にも戸惑いが見られます。患者の

戸惑いの理由は、わが国では人々に自己決定権という意識がまだ薄いために、その考え方を病気に適用して、「自分の病気だから自分でどうするかを決めなければならない」と言われてもどうしていいかわからないということだと思います。また、医師の側の戸惑いの理由には、これまでは「病気のことは専門家である医師に黙って任せていればよい」という、長年の慣習からなかなか抜け出せないところにあるのではないでしょうか。ともあれ、医療のプロセスにおいて、医師が患者の病気についての情報を十分に患者に提供して、その情報をもとにして患者が納得して医療を受けるためのインフォームド・コンセントは、医療の現場においては大変に大切なことですから、これからだんだんと定着して来ることでしょう。

神がなさる罪という病気についてのインフォームド・コンセント

イエスは答えて言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」

（ルカの福音書5・31～32）

医療におけるインフォームド・コンセントの重要性については、前に述べたことからおわかりと思いますが、ここで、それよりずっと大切なインフォームド・コンセントについて考えたいと思います。神は、私たち人間に対して、はるか昔から医療においてなされるインフォームド・コンセントと同じように、いや、それ以上に懇切丁寧に、罪という病気についてインフォームド・コンセントをしてくださっているのです。では、神はどのように、これをしてくださるのでしょうか。

インフォームド・コンセントのプロセスは、まず診断した病名を病人に告知することから始まりますが、神もまず私たち人間に、「あなたは罪という病気に罹っている」と告げてくださっているのです。そして、神が行ってくださるインフォームド・コンセントを受ける側の人間は、ほとんどが罪という恐ろしい病気の自覚症状がありません。そこで神は、聖書を通して端的に「あなたは今、こういう危険な病気に罹っているのです」と告げてくださっています。

もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。

（ヨハネの福音書8・24）

第二に、その病気によって犯されている部位と病気の原因についての説明があります。すなわち、その病気は霊の病気であり、その原因は、神から離れた、わがまま勝手な、放縦生活の結果であることが示されます。

愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行なっている。善を行なう者はいない。

（詩篇14・1）

第三に、その病気の症状について、聖書を通して次のような説明があります。

自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者、情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快楽を愛する者、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者……。

（テモテへの手紙第二3・2～5）

右にあげた、これらの症状をまとめると、罪という病気に罹っている人は、神に心を向けるのではなく、自己中心になり、自分の考えや行為を正当化し、自分の欲を満足させる

のに、いっしょうけんめいになるという症状を呈するということです。

第四に、その病気の予後、すなわち結末について説明してくださいます。

イエスは彼らに言われた。「わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜すけれども、自分の罪の中で死にます。わたしが行く所に、あなたがたは来ることができません。」

（ヨハネの福音書8・21）

このように、罪という病気は予後が極めて悪く、からだの死ばかりか、その後、神の御子イエス・キリストの行くところ、すなわち、天国に入ることが決してできないことを知らせてくださいます。

第五に、この病気の治療法について説明してくださいます。すなわち、この病気には十字架にかかられたイエス・キリストのいのちが唯一の特効薬であること、そして、この薬を受け取るためには、自分が罪という病気に罹っており、その原因が神に背いて、わがまま勝手な生き方をした結果であることを認め、心から悔い改めて、この病気を治してくださることのできる、たった一人の名医であるイエス・キリストのところへ行くことを教えてくださいます。

私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。

（ローマ人への手紙5・6～10）

最後に、この病気についての必要な情報がすべて提供された後は、「どうするかはあなた自身が自分で決定するように」と、選択を私たちの自由な意志にまかされます。しかし、どちらを選ぶほうが自分にとって良いかは、すでにおわかりのことと思います。

私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。

（申命記30・19）

以上のように、罪という病気を持った人間に対する、神のインフォームド・コンセントは完全です。しかも、医師は、自分の担当の患者に対して、納得できるように懇切な説明をしなければならない責任と義務がありますが、神には、ご自分に背いた結果、罪という病気に罹った自分勝手な私たち人間に対して、説明すべきなんらの責任も義務もありません。けれども愛とあわれみの神は、ご自分に背いた私たち人間が永遠の死を迎えなければならないのを当然のことと思われず、ただあわれんでくださって、罪を悔い改めて、ふたたびご自分のもとに帰ってくるようにと切に願われ、この罪という恐ろしい病気について懇切なインフォームド・コンセントをしてくださるのです。

信頼者からなされるインフォームド・コンセント

ところで、インフォームド・コンセントは、信頼する医師からなされた時に、はじめてその効果が現れます。この医師はほんとうに自分のことを考えてくれている、と思えた時に、病人は医師の説明に納得し、同意することができます。では、神はどうでしょうか。信頼できる方でしょうか。神以上に信頼できる方はありません。なぜなら、ご自分に敵対

し反抗しているような者をも、

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

（イザヤ書43・4）

と言ってくださり、罪という恐ろしい病気から救い出すために、ご自分のひとり子のイエス・キリストのいのちを犠牲にされたほどに、私たちを愛してくださっている私たちの造り主だからです。

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

（ヨハネの手紙第一4・9～10）

この愛とあわれみの神に信頼して、神の説明に心から同意し、イエス・キリストが十字架の上で成し遂げてくださった、罪からの解放という治療を受け入れる決心をすれば、ただちに恐ろしい罪の病から癒され、永遠のいのちをいただくことができるのです。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イ

エスにある永遠のいのちです。

（ローマ人への手紙6・23）

癌の告知と罪の告知

わたしは、あなたがたが自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。

（ヨハネの福音書8・24）

癌の告知

冒頭の聖書のことばは、神の御子イエス・キリストが、私たち人間に対してなさった罪という病気の告知です。だれでも、主治医から「あなたは癌です」と言われたら、大変なショックを受けるにちがいありません。なぜなら、それは「あなたはもうすぐ死ぬ」と言われたのと同じとも受け取れるからです。わが国では概して医師は患者に癌の告知をしたがりません。日本医師会が数年前に行った全国規模の調査の結果は、癌患者の約一割に告

知がなされているに止まっています。しかも、告知された癌のほとんどは、早期癌、すなわち治る見込みのある癌でした。　医師はなぜ治る見込みのない癌の告知をしたがらないのでしょうか。先頃、東海大学病院で行われた、癌の告知をめぐってのシンポジウムでも、シンポジストの医師のすべては、告知をしないという立場でした。告知をしない理由をまとめると、「一方的に告知をするのは簡単だが、それではあまりに無責任である。告知によって患者の生きる希望を断ち切ることになる。患者に癌の痛みに加えて、死の恐怖の苦しみを与えるのは残酷である」などでした。まことにもっともなことです。治る見込みのない、末期癌の告知をした場合、死の恐怖におののく患者に対して医師は何ができるでしょうか。「がんばってください」とか「きっと良くなりますから」などというそらぞらしい励ましや慰めの言葉は、患者にとって何の助けにもなりません。告知を受けた患者は自分の病気を知ったために、やがて迎えなければならない死について、医師にも看護婦にも家族にも、何の解決も助けも与えてもらえないままに、一人で死の恐怖におびえ続けなければならないのです。その恐怖に対して「何もしてあげることができないから告知できない」というのが医師の偽らざる気持ちではないでしょうか。

罪の告知

しかし、はじめに述べた罪の告知は、実は癌の告知よりもはるかに恐ろしいのです。それは罪は癌よりも恐ろしいからです。そして、ほとんどの人はこのことに気づいていません。なぜ罪は癌よりも恐ろしいのでしょうか。癌は肉体の死で終わります。肉体の死を聖書では第一の死と言います。けれども、癌で死のうと何で死のうと、罪を持ったままで死ぬと肉体の死で終わるのではなく、天国に行くことができないところに、癌よりも恐ろしい罪の恐ろしさがあるのです。神の御子イエス・キリストは十字架にかかられる前に、ご自分を罪からの救い主であることを認めようとしない人々に対して次のように言われました。

わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜すけれども、自分の罪の中で死にます。わたしが行く所に、あなたがたは来ることができません。

（ヨハネの福音書8・21）

天国に行けなければどうなるのでしょうか。その人は死んだ後、神のさばきの日にさばかれて、永遠に苦しむことになるのです。これを第一の死である肉体の死の後に来る死、

すなわち第二の死と言います。ヨハネは、神のさばきの日に、第二の死を宣告される時の状況について、次のように書いています。

また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

（ヨハネの黙示録20・12～15）

罪の告知はイエス・キリストによってなされる

さて、癌の告知は主治医がしますが、罪の告知はイエス・キリストがなさいます。前に述べたように、罪の告知は大変に恐ろしいものですが、決して癌の告知のように希望のない、救いのない、解決のない、残酷なものではありません。医師は、告知をしたとしても、

末期の癌患者を死から救い出す何の力も方法も持っていません。しかし、イエス・キリストは、罪の告知の際に、「あなたがわたしのことを信じなければ自分の罪の中で死ぬ」とはっきりと示してくださっているのです。このことばを言いかえますと、「あなたがわたしのことを信じれば第二の死を免れる」ということになります。つまり、イエス・キリストは、恐ろしい第二の死に至る罪から、私たち人間を救い出す方法を明らかに示したうえで、私たち人間に罪の告知をしてくださっているのです。

罪とは第二の死に至る霊の病

罪とは霊の病気です。それも癌よりも恐ろしい第二の死に至る病気です。その症状は、神に背き、自分の思いや欲を第一にして生きるというものです。罪という病気は、自覚のない場合が多い、という点でも癌に似ています。私たちはみな、神がどのような方かも知らずに生きていても何の不都合もないし、自分の考えにもとづいて生きるのは当たり前だと思っていますから、それが罪だといわれてもピンと来ません。なかなか納得できません。しかし、それが罪の病気の特徴なのです。世間一般には、罪というのは、殺人、窃盗、詐欺などのように、人に損害や迷惑をおよぼすことだと考えられています。したがって、自

分は人に迷惑も損害も与えたことはないのだから、罪とは関わりはない、と思っても不思議ではありません。しかし、生まれてから今まで、人のことを罵ったり、軽蔑したり、憎悪したりしたことがないと断言できる人は、一人もいないはずです。世間では、自分の心の中で人を憎悪しても、その人に直接損害をかけなければ罪とはならないと考えます。しかし、イエス・キリストは、これらも罪であると言われます。

昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。

（マタイの福音書5・21～22）

人を殺した者だけでなく、人に向かって罵る者も、神のさばきを受け、永遠に苦しまなければならない、すなわち、人を殺すのも、人を憎悪するのも、同罪であるとイエス・キリストは言われました。どうしてでしょうか。それは、人を憎む心の中に人を殺す思いが潜んでいるからです。そして、神は、人殺しを、その行為によってさばかれるのではなく、人を憎む思いによってさばかれるのです。神は、人間の心の中を見られる方だからです。

主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」

（サムエル記第一16・7）

この神から見れば、私たちはみな、殺人罪を犯したことになります。聖書の別の箇所では、このことを端的に言っています。

兄弟を憎む者はみな、人殺しです。

（ヨハネの手紙第一3・15）

私たちは殺人罪を犯しただけではありません。姦淫罪も犯しています。イエス・キリストは次のように言っておられます。

『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。

（マタイの福音書5・27～28）

また、私たちは自分が持っていないものを人が持っていると、欲しいという思いを起こ

します。そして、その思いが盗みに発展するのです。したがって、人のものを欲しいという思いは、盗んだのと同じである、として神はさばかれるのです。

すべての人間は神に対する罪を犯した

以上のことに共通するものは何でしょうか。それは、これらの思いはすべて、人間がだれでも持っている性質、すなわち自分を正しいとする自己中心の考えや自分の欲を満たそうとする所有欲にもとづいているということです。聖書で言うところの罪が、自分を正しいとする心、自分を義人とする心にあるのですから、すべての人間は罪を犯したことになります。これについて、パウロは次のように言っています。

私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。」「彼らののどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」

（ローマ人への手紙3・9～14）

ここにある義人とは、人間が認める義人のことではなく、神が義と認める人であります。また、「善を行なう人はいない」という善とは、人間的な考えによって現される善行という意味ではなく、人が喜んで神に従う結果なされる行為を言います。このように神に対する罪のゆえに、私たち人間はみな、肉体の死の後に神のさばきを受けて、第二の死の宣告を受ける定めのもとにあるのです。

しかし、神は全き愛の方であります。神は、この恐ろしい罪を持っているのも知らずに、第二の死に向かって歩いている私たち人間を見過ごすに忍びず、罪の完全な治療法を用意してくださったうえで、罪の告知をしてくださったのです。その治療法こそイエス・キリストの十字架であり、流された血、すなわちいのちです。聖書にはこう書かれています。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

（ペテロの手紙第一2・24）

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

（ヨハネの手紙第一1・7）

イエス・キリストは、イエス・キリストから罪の告知を受けて、自分が罪という恐ろしい病気に罹っていることに気づき、イエス・キリストだけが罪を癒してくださることのできるただ一人の方であると信じる者に対して、次のように約束してくださっています。

わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

（ヨハネの福音書10・28）

W教授の死

私は、ここで同僚のW教授のことを思い出さざるを得ません。W教授は、前立腺癌に罹られ、入院しておられましたが、ある日、私の部屋に病室のW教授から電話がありました。それは、「自分は癌の末期であることを知っているが、ここの末期医療、ターミナル・ケアについては、まだ十分とはいえない。自分をたたき台にして、末期医療をやってもらいたい」というご依頼でした。

末期医療とは、簡単に言えば、末期の病人が共通に持つ痛み、すなわち肉体的痛み、精

神的痛み（家族との別離や、やり残した仕事などについての心の痛み）、社会・経済的痛み（死後における家族の生活の心配や自分が社会から忘れ去られるのではないかという寂しさ）、霊的痛み（死と死後についての恐れや不安）を取り除くことができるように支援し、病人が安らかに死を迎えられるように配慮する医療であります。このためには、医療従事者や家族はもちろん、福祉関係者や聖職者の協力が必要となります。

W教授の場合には、肉体的な痛みは、麻酔科の協力によって解決のめどがつき、また精神的痛みや社会・経済的痛みは、すでに学校関係者や夫人の協力によって問題は解決されておりました。しかし、残された問題は、霊的痛みでありました。私がW教授の病室にお伺いした時、癌の転移によって視力が失われていたW教授は、傍らの夫人の手をしっかり握っておられました。そして、私に対して「暗闇が恐ろしい、孤独が恐ろしい、だから家内の手を握っている、こうしている時だけが安心だ」と言われました。W教授は、死を恐れておられたのです。

W教授は、日頃から無神論者として学生に知られた方でした。その方が自分の死が間近いことを知り、しかも失明によって暗闇に置かれた時に、孤独と死に対する恐れを、このように率直に私に告白してくださったのです。私はW教授に「死の恐れ、不安はだれにで

もあること、愛する夫人の手を永遠に握っていたくても、やがては離さなくてはならない時が来ること、しかし、あなたはご存じなくても、あなたを愛して死に打ち勝つ永遠のいのちを与えよう、死から救い出そうと、手を差し延べてくださっている方がおられ、その方に助けを求めてその手を握った時に、その方はあなたの手を取って天国まで連れて行ってくださること、その方は肉眼では見えないが、あなたの傍らにいつもおられてあなたの救いのために祈っておられること、その方は神が人となったイエス・キリストであること」をお話しました。

W教授は私の話を真剣に聞いておられました。病状はお会いするたびに進行していました。ある日、病床をお見舞いした私が「あなたが承知すれば、あなたのために、イエス・キリストに祈ろうと思うが」と申しますと、「頼む」と言われたので、「神に逆らっていたW教授の罪の代価をご自分のいのちで支払って赦してくださったうえに、永遠のいのちを与えようと思っておられるイエス・キリストの恵みを、W教授が受け入れることができますように」と祈りました。祈り終えた時、W教授の閉じた目から涙が頬に流れ伝っていました。私はその後、地方に行かなければならない用事のために、病室に伺うことができませんでしたが、W教授はそれから数日後に亡くなったことを後から知りました。しかし、

葬儀直後に夫人から手紙をいただき、W教授は私が祈ってから亡くなるまでの間、病気に罹られて以来かつてなかったような、安らかな状態であったことを知ることができました。その手紙から、私はW教授の心にそのような平安が与えられたのは、W教授がそれまで神に逆らって生きて来たことを心から悔い改めて、素直に神の愛の御手にすがった結果、死に対する恐怖をイエス・キリストが取り除いてくださったということを確信したのです。私はW教授に永遠のいのちを与え、天国に召してくださった、イエス・キリストに心から感謝しました。

主を呼び求める者すべて、まことをもって主を呼び求める者すべてに主は近くあられる。また主を恐れる者の願いをかなえ、彼らの叫びを聞いて、救われる。

（詩篇145・18～19）

イエス・キリスト以外に罪からの救いはない

W教授の他にも、天国に行けるという希望をもって、平安のうちに亡くなった方々はたくさんおられます。それはイエス・キリストを信じる信仰によって罪は癒され、イエス・キリストから永遠のいのちをいただいているという確信があるからです。また、イエス・

キリストがいつも傍らにおられて、この世のいのちの終りまで、絶えず励まし、慰めてくださるからです。

日本では、癌で死亡する人は、全死亡の約三分の一と言われています。しかし、罪で死ぬ人は、イエス・キリストを信じない限り百パーセントです。まだ、イエス・キリストを信じておられない方は、イエス・キリストによる罪の告知をご自分のこととして、心を開いて受け入れ、罪を癒してくださるただ一人の方であるイエス・キリストを信じていただきたいと思います。

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

（使徒の働き4・12）

最後に私は、死を間近にした患者に、死に勝利して永遠のいのちを与えてくださるイエス・キリストを信じれば、もはや肉体の死は恐れるべきものではないこと、天国への希望が約束されていることを、確信を持って伝えることのできる医師が一人でも多く生まれることを願って止みません。

安楽死と尊厳死を通して死の問題の解決を考える

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

（ヨハネの福音書14・27）

安楽死と尊厳死

安楽死と尊厳死という二つの言葉の意味は、しばしば混同されたり、実際と異なった内容あるいはイメージでとらえられたりしていますので、まずはじめに、この二つの言葉の意味について簡単に説明したいと思います。

安楽死とは、文字通り読めば安らかに楽しく死ぬことですが、実際には薬物その他の方法によって、本人あるいは他人が、人為的に、病気による苦しみを早く終わらせることを

言います。

尊厳死とは、医療における生命維持のための装置や延命技術の発達によって、病気の末期にある人間の尊厳性が無視されるような状態で、無理やりに生かされることに対する批判から生まれた概念です。具体的には、本人の明確な意志表示があれば、その意志を尊重して、いたずらな延命のための措置は打ち切り、人間の尊厳性を保って自然に死を迎えられるようにすることを言います。

日本医師会では、この二つの死の概念について、これまで、はっきりとした見解を示していませんでしたが、最近、医療の場でも、患者個人の死に臨んでの希望を可能な限り取り入れるべきであるという世論の高まりを受けて、一九九二年三月、日本医師会の生命倫理懇談会から、「末期医療に臨む医師の在り方」という報告書が出されました。この報告書で特記すべきことは、従来、わが国の医療でタブーとされていた、安楽死と尊厳死について、明確な見解を示したことです。まず、尊厳死について、この報告書では「病気の末期において、患者がリビング・ウイル（わが国では「生前発効の遺言書」と訳しています）のような形で、自分の意志を明示している場合には、医師はその患者の人格にもとづく自己決定として、その患者の意志を尊重すべきである」としています。リビング・ウイルと

いうのは、「自分の病気が回復の見込みがなく、末期の状態であることがわかった時には、単なる延命だけのための治療は打ち切って、自然に死を迎えたい」という内容を、遺言のように文書にしておくことを言います。しかし、報告書ではこの場合でも、水分や栄養の補給、感染の防止、床ずれの予防や治療まで打ち切ることはできない、とも言っています。

次に、安楽死については、この報告書では「安楽死とは苦痛を訴える末期の患者の求めに応じて、医師その他の人が、注射などの積極的な方法を用いて、患者を死に至らしめること」と定義し、これは倫理的に絶対に認められないとしています。

日本医師会のこの見解は、一九八七年の世界医師会でなされたマドリード宣言を、わが国でもようやく追認したことになります。この報告書の最後のところでは、「医師としても、今や、ただ単に最大限の延命をはかるという治療方針の上だけに立つのではなく、何が患者にとって最良の選択になるのかを考慮し、時には安らかな最後を迎えさせるのが望ましいことに思いを致すべきである」と結んでいますが、この報告書を契機として、死が間近かに迫っている患者に、単なる延命措置をほどこし、ただ患者の苦痛を長引かせてしまうという不条理が、これから少しずつ改善されてゆくことを期待したいと思います。

死とは何か

ここで、いったい死とは何なのかという、大切な問題について考えてみたいと思います。先の報告書で取り上げている死は、肉体の死であり、たとえ肉体がいかに苦痛なく、安らかに死を迎えられたとしても、それで死の問題が解決したとは言えません。なぜなら、神に似て造られた人間は、肉体だけの存在ではなく、霊、たましいを持つ存在であり、その霊が死を恐れるからです。

神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

（創世記1・26～27）

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

（創世記2・7）

人間のからだは、他の生物同様に物質から成り立っています。しかし、神が吹き入れてくださったいのちの息によって、生きるものとなった人間は、他の生物と異なる霊的存在、つまり神と親しい交わりを持つべく生かされているものなのです。動物は神から与えられた本能によって生きています。喜怒哀楽など、ある程度の感情は与えられていますが、神を求める思いや、神によって与えられた良心などの霊の働きは持っていません。人間だけに与えられた霊の働きが、生と死、善と悪、天国と地獄、永遠と有限、義と不義などについて考えさせるのです。けれども、人間が健康で元気な時には、このような問題で真剣に悩むことはあまりありません。この世のことに心が奪われているためです。重い病気に罹った時、それも不治の病であることを知った時に、はじめて私たちの霊は、人間はなぜ死なければならないのか、死んだらどこへ行くのか、死の暗黒の世界とはどんな恐ろしい所かなどについて真剣に悩むようになり、また、自分自身の問題として死を恐れるようになります。しかし、死の問題の解決は、いくら人間が考えてもわかりません。人間がなぜ死ぬのか、死んだらどうなるのか、その答えは人間を造られた神の書である聖書にのみ、はっきりと記されています。聖書には死は最初に造られた人アダムから始まり、その子孫である人間一人残らずが犯した罪の結果である、と書かれています。

そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、――それというのも全人類が罪を犯したからです。

（ローマ人への手紙5・12）

ひとりの人とは最初に造られた人アダムのことです。そして、この罪とは、人が定めた法律でいう罪ではなく、その罪の源泉である、神を認めず、恐れず、常に自分を義とするという自己中心の心や態度のことを言います。

第一の死と第二の死

罪を持ったままで死んだ場合、罪の結果である死は、肉体の死にとどまりません。霊の死、滅びも含まれるのです。

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている。

（ヘブル人への手紙9・27）

「一度死ぬ」とは、肉体の死のことであり、その死の後に、霊が神のさばきを受けます。聖書では、この肉体の死を第一の死と言い、神のさばきの結果、宣告される霊の永遠の滅

びを第二の死と言います。この第二の死は、第一の死の後、神のさばきの日に、神を恐れず、神に背を向けたまま死んだ者すべてに、神が永遠に見捨てると宣告される時から始まります。ヨハネは、この時の状況を次のように預言しています。

私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

（ヨハネの黙示録20・12、15）

第一の生と第二の生

人間には、このように死は二度あるが、生も二度あると、聖書は言っています。はじめの生は、肉体の生であり、女から生まれるものです。しかし、この第一の生だけの人間は、生まれながらに神を無視し、自己を正しいとするという罪の性質を持っているために、はじめに神が愛をもってご自分と応答する者にしようと、人間に吹き込んでくださった霊は

死んだような状態になっています。そのため、私たちはいつも神に背を向けて、自分を中心とし、自分の欲を満たすことを追及したり、自分の生活や健康や仕事のことばかり心配したり、自分と他人を比較して、うらやんだり、ひがんだり、ねたんだり、あるいは見下したりしながら生きているのです。その人生には心の底からの喜びや平安はありません。

一方、第二の生は、神から生まれる生です。この生は、自分の中にある罪を知り、その罪から救い出されたいと切に願う人間を、罪と死の束縛から救い出してくださるために、神がこの世に遣わしてくださった神の御子イエス・キリストを信じることによって、神の恵みとして与えられる、霊と肉の新しい生です。イエス・キリストは次のように言われました。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。

（ヨハネの福音書5・24～25）

わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。

わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。

（ヨハネの福音書6・40）

この神の御子イエス・キリストを信じ、自分の救い主として受け入れて、第二の生をいただいた者は、イエス・キリストが確約してくださった通り、第二の死に会うことは決してありません。さらにすばらしいことは、第二の生を受けた者は、肉体も永遠に生きるものとしてよみがえらされるということです。いったんは、第一の死である肉体の死によって、その骨が墓にほうむられても、その人は、復活して天に戻られたイエス・キリストがご自分を信じた者を迎えに、ふたたび来ると約束されたその日に、朽ちない、聖い、病気もなく、老いることもない、完全な肉体によみがえることができるのです。イエス・キリストは十字架の上で死んで、墓にほうむられてから三日後に復活し、弟子たちをはじめ、五百人以上の人に現れて、肉体のよみがえりが、たしかに事実であることをご自身で証明してから天にのぼられました。パウロは次のように証言しています。

その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現われました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。その後、キリストはヤコブに現われ、それから使徒たち全部に現われました。そして、最後

に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。

（コリント人への手紙第一15・6～8）

そして、さらにパウロは、イエス・キリストの復活が、人間のいのちにとってどんなに大きな意味を持っているかについて次のように言っています。

もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。

（コリント人への手紙第一15・19～22）

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

（ピリピ人への手紙3・20～21）

イエス・キリストとの人格的出会いの必要性

しかし、イエス・キリストを救い主と信じているにもかかわらず、死が間近かに迫ったことを知ると、死の不安や恐怖におののく人がいます。どうしてでしょうか。それは、イエス・キリストを頭の中で観念的に信じているだけで、イエス・キリストとの人格的な出会いをしていないからです。私たちが、ある人を信頼することができるのは、その人の人格を知っているからではないでしょうか。では、どうしたらイエス・キリストの人格を知ることができるでしょう。それは「キリストは、私を救うために、ご自分のいのちを捨ててくださったほど、私を愛してくださっている」と、イエス・キリストの十字架上での身代わりの死と、限りない愛に触れた時ではないでしょうか。イエス・キリストが私たちひとりひとりに与えてくださった、このような大きな愛を確信した時、私たちは個人的にイエス・キリストとの人格的な出会いを体験します。そして、この方こそ自分の救い主であり、すべてをお任せできる方であることを心から信じられるようになります。パウロは、これについて次のように言ってます。

私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。

（テモテへの手紙第二1・12）

そのイエス・キリストが、

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。

（ヨハネの福音書11・25）

と約束してくださり、そのイエス・キリストが、冒頭にあげたように、「わたしがあなたに与える平安は、この世の平安とは違うわたしの平安なのだから、心を騒がしてはいけません、恐れてはいけません」と約束しておられるのです。このイエス・キリストに心から信頼する時に、肉体の死はすべての終りではないばかりか、その後に約束されている朽ちることのない永遠のたましいと肉体が与えられることを確信することができるようになり、イエス・キリストに自分をゆだねることができるようになるのです。

ほんとうに平安な死を迎えることができるために

パスカルが、「私たちはイエス・キリストによってのみ生と死を知る。イエス・キリストから離れては、私たちは私たちのいのちが何であり、死が何であるかを知らないし、神についても私たち自身の本性についても、あいまいさと混乱のほか何も見ることができない」と言っている通り、ほんとうに平安な死は、医学によっても、哲学によっても、その他この世のどのような知恵によっても得ることはできません。

ほんとうに平安な死は神の恵みによってのみ得られるものです。その恵みをいただくためには、先に述べたように、まず神の愛を無視し、自己を正しいと主張し続けて、自己中心の人生を歩んでいたという罪を心から悔い改め、イエス・キリストの十字架上での死が、その傲慢な自分の罪の身代わりであったこと、自分を罪と死から解放してくださるものであることを信じ受け入れることです。そうすれば神はその信頼に答えてくださり、第二の生を与えてくださいます。次に、自分のためにいのちを捨ててくださったイエス・キリストに全幅の信頼を置いて、すべてをゆだねることです。そうすれば、イエス・キリストが与えてくださるまことの平安によって、永遠のいのちへの希望を持って、天国を望み見つ

つ第一の死である肉体の死を迎えることができるのです。これこそが、私たちの創造主である神が与えてくださったいのちを永遠に全うするための、まことの尊厳死なのです。

臓器移植と永遠のいのちの移植

人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。

（ヨハネの福音書15・13）

最近、臓器移植が究極の治療法として世間の関心を集めています。臓器移植とは、一言でいえば、病気やけがのために機能が完全に失われてしまった臓器、言い換えれば死んでしまった臓器を、健康な臓器に置き換える治療であります。角膜や皮膚の移植は以前からも行われていましたが、近年、医学技術の進歩に伴って、各国で人のいのちを維持するためになくてはならない臓器である腎臓、肝臓、心臓の移植が行われるようになってから、臓器移植は倫理的な観点からも大きな問題として取り上げられるようになりました。

臓器移植は他の治療法とは全く異なる

臓器移植が、他の治療法と大きく違う点はどこにあるのでしょうか。ふつう、病気の治療は、おもに、医薬品を用いるか、あるいは手術によって病気の部分を切除するというような方法によって行われてきました。したがって、医薬品や医療器具の不足がない限り、（そのようなことは戦争や大災害でもなければ起こりませんから）だれでもこれらの治療は受けられます。

しかし、これらの治療に比べて、臓器移植による治療法には、何よりも健康な臓器が不可欠であり、それを提供してくれる人がいなければ、たとえ臓器移植の専門医や設備などの条件が整っていたとしても治療はできません。ここが臓器移植治療が他の治療と根本的に違うところです。そして提供される臓器の数は、いつも、はるかに需要に満たないというのが実状です。

さらに、臓器移植には、組織適合性という絶対的な条件があります。人間のからだには、自分と他人を識別して自己を防衛する機能があり、他人の組織が入ってくると、その機能が働いて拒絶反応を起こします。拒絶反応が起こると、せっかく移植した臓器も死んでし

まうばかりか、移植を受けた人のいのちも大きな危険にさらされることになります。この拒絶反応を防ぐためには、前もって組織適合性の検査をして、適合性を確かめなければなりません。提供者の臓器の組織と移植を受ける人の臓器の組織が適合する確率は非常に低いので、ますます移植可能な臓器の数は少なくなります。そのうえ、このようにして、ようやく組織適合性のある健康な臓器を見つけても、移植までの間の時間が長引くと取り出した臓器が死んでしまいますから、できるだけ早く移植しなければなりません。

ギフト・オブ・ライフ

このように臓器移植という治療には、他の治療に見られない多くの困難があるのですが、これらの問題解決のためには、まず何よりも健康な提供臓器の数を増やすのが必要なことがおわかりになると思います。以前には、提供臓器の絶対数の不足から生じる病人の焦りにつけ込んだ商売が現れ、発展途上国の貧しい人から臓器を買うということが行われたこともありました。しかし、このようなことは、もちろん倫理に反することであり、世界医師会でもこのことに強く反対して臓器売買を禁止する宣言が出され、現在では少なくとも表向きにはできなくなりました。しかし売買は論外としても、臓器の提供は強制されるよ

うなことがあってはなりません。あくまで臓器を提供する本人の自由な意志にもとづくものでなくてはなりません。このように考えると、移植のために提供される健康な臓器は、まさに宝物のように少なくかつ貴重なものとなります。世界各国には、自分が脳死状態になったら、自分の臓器を、移植を必要としている病人に提供したいという人たちの団体があり、そこに登録すれば自分の意志通りに自分の臓器が移植に使われることになっています。その意味からでしょうか、アメリカではこのようにして提供される臓器のことをギフト・オブ・ライフ、いのちの贈物と呼んでいます。

わが国でも脳死を人の死と認めるようになった

わが国では、昨年、政府の「脳死と臓器移植に関する臨時調査会」が脳死を死と認め、本人の意志であれば脳死体から臓器を移植することができることを承認しました。これまでは心停止つまり心臓の鼓動が完全に停止した時点をだれもが死と考えていましたし、これはだれでも納得しやすいものでした。これに対して脳死とは、脳の機能、特に脳幹と呼ばれる生命維持の中枢部の機能が永久に停止して決して回復しない状態を言い、一定の「脳死判定基準」に従って行う検査によって判定されます。それまでは、脳死は人の死と

して認められていませんでしたので、これによって臓器提供の道は、より広く開かれましたが、日本人の古来からの死に対する観念からすると、一般的には、まだなかなか脳死を死として割り切る気持ちにはなれないのが現状です。

人間の愛の限界

さて、肝臓や心臓は一つしかありませんから、生きている人の健康な肝臓の一部を移植するという、いわゆる生体肝移植以外は、脳死体から提供される心臓や肝臓だけが頼りです。しかし、腎臓は二つあるので、わが国では例外的に、親子間、夫婦間に限り、しかも外部からの圧力なしに、全く自由な本人の意志によって、自分の腎臓を重い腎臓病に罹っている家族にあげたいと申し出た人に限って、組織適合性が一致すれば、倫理委員会の審査を受けたうえでこれを認めることにしています。私は倫理委員会の一員として、このような方々とお会いして、お気持ちを聞いたことがあります。その方々が、自分が病気でもないのに、痛みばかりでなく、場合によってはいのちの危険を伴うかも知れない腎臓の摘出手術をしてまでも、愛する家族のために自分の臓器をあげたいという、愛の深さ、大きさに大変感動したのを覚えております。しかし、私はそのような方々にお会いするたびに、

いつも一つの同じ質問をしました。その質問は、「もし、あなたが臓器をあげようとする相手が、愛する親や子、夫や妻でなく、見ず知らずの他人だとしたらどうしますか」というものでした。その方々の答えは、表現はそれぞれ違っても、いつも同じ内容でした。すなわち、例外なくすべての方が「他人には痛みと危険を犯してまで自分の臓器をあげることは決してしない」と答えられたのです。この答えを非難する人はいないでしょう。だれでもそのように答えるはずです。ここに人間の愛の限界があるのです。冒頭にあげた聖書のことばに「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません」とあるように、最高の愛は、自分のいのちさえ惜しまぬ自己犠牲であります。しかし、人間はこの愛の対象を、この方々のように限定してしまうのです。また、腎臓は二つありますから、一つを提供しても、もう一つの腎臓によって生きることはできます。しかし、心臓となると提供者が死ななくては臓器をあげることができません。はたして私たちはそのために喜んで死ぬことができるでしょうか。しかも、このような犠牲を払って移植された宝物のような臓器も、移植を受けた人のいのちを永遠に生かすことはできません。人間が与えることのできるギフト・オブ・ライフは、この点でも限界のあるものなのです。究極の治療と言われる臓器移植でも、人間を永遠に生かすことができないのは、認

めざるを得ない事実です。

キリストのいのちによる永遠のいのちの移植

人間はその人生において、いろいろのものを求めます。ある人は富を、ある人は名誉を、ある人は権力を求めます。しかし、だれもが共通して求め続けるものは、健康ではないでしょうか。そして、健康を求めるその心の奥には、他人の臓器を移植してでも生き続けたいという思い、つまり、死にたくないという思いがあるのです。では、この人間の求め続けてきた、いのちの問題の解決はどこにあるのでしょうか。それは、人間によって考え出された限りあるいのちの移植法ではなく、永遠に朽ちることのないいのちの移植でなければならないのです。

この人間には決してできない完全な臓器の移植、永遠のいのちの移植の方法をすでに完成してくださっている方があります。それは天地万物の創造主であり、永遠に生きておられ、私たち人間ひとりひとりを造ってくださった神です。その神は、私たち人間が永遠に生きるようにと、愛するひとり子のイエス・キリストを、永遠のいのちの提供者として、この世に遣わしてくださったのです。イエス・キリストはご自分の身分と使命について次

のようにはっきり言われています。

わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。

（ヨハネの福音書10・28～29）

では、イエス・キリストはどのような方法で、私たちに永遠のいのちを提供してくださったのでしょうか。それは、ご自分が死ぬことによってであります。前に述べたように、人間は自分が愛する者のためにしか臓器提供者となることはできません。しかし、神は、神を愛するどころか、神に反逆し、神などいないとうそぶいて、自分の欲を満たすことしか考えない人間、言い換えると、たましいの死んだ状態のひとりひとりの人間のために、御子イエスを永遠のいのちの提供者としてこの世に送り、十字架にかけて御子の永遠のいのちを提供してくださったのです。

神にとっては、ご自分に背いている人間ひとりひとりが、かけがえのない愛の対象なのです。

それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みによって、相続人となるためです。

（テトスの手紙3・7）

この神の愛の賜物が、御子イエス・キリストの永遠のいのちなのです。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ人への手紙6・23）

神はご自分に対する背きの罪という病気のために、霊、たましいが死んでいる人間をも愛し、永遠の死に至る罪から救い出してくださるために、御子イエス・キリストの永遠のいのちを贈物として提供してくださったのです。

そして神の御子イエス・キリストのいのちの移植は、人間の臓器移植とは、とても比較することもできないほどの完全なものなのです。第一に、二千年前に十字架の上で死んで提供してくださったイエス・キリストのいのちは、その時以来、今日も、さらに将来にわたっても永遠に新しい、生きたいのちであるということです。第二に、イエス・キリストのいのちは、ただ一つで限りなく多くの人間に移植ができるということです。第三に、イ

エス・キリストのいのちの移植には、組織適合性の検査は必要がない、すなわちすべての人間に適合性があることです。

キリストのいのちの移植を受けるための条件

しかし、イエス・キリストの永遠のいのちを移植するには、ただ一つだけ条件があります。それは、ちょうど臓器移植を受けるためには、自分の臓器が完全にだめになって、移植以外に助かる道はないということが、はっきりしていることが条件であることに似ています。すなわち、イエス・キリストの永遠のいのちの移植を受けることのできる条件は、自分が神に対する背きの罪という、自分ではどうすることもできない、たましいの死んだ状態にあることを知り、神から離れて自分勝手に生きていたことを心から悔い改めて、イエス・キリストの永遠のいのちの移植を切に求める人に限られているのです。自分には罪はない、自分は正しい、と思っている人には、神は御子イエス・キリストのいのちを提供することはなさいません。聖書でイエス・キリストが、

医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。

（ルカの福音書5・31～32）

と言われたのは、その意味です。

腎機能が完全に失われて尿が出なくなり、このままでは尿毒症のために死ぬしかなかった人に、健康な腎臓が移植されると、その腎臓はただちに移植を受けた人の体の中で働きはじめてすぐに尿が出てきます。それと同様に、自分中心に生き、滅びに至るしかなかった人が、心から神の前に悔い改めてイエス・キリストのいのちの移植を受けると、悔い改めると同時に、それまで神に対して死んでいたその人のたましいは生き返り、その結果、神に対して目が開け、それまでの自分の小さな欲望を満足させることを目的としていた人生とは比べることのできない、永遠に生きる大きな喜びと平安と希望に満ちて、神と共に歩む人生を過ごすことができるようになるのです。

わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

（ヨハネの福音書4・14）

もう一つの痛み

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。

（イザヤ書53・4）

心身の痛み

痛みは、だれにとっても恐ろしく、不快なものです。したがって、いかにして痛みを止めるか、あるいは痛みを和らげるかが、昔から人間にとっての課題でした。民間療法でも現代医学でも、多くの鎮痛剤や鎮痛法が考え出され、使われているのもそのためです。

痛みは、病気の種類や程度によって、その強さや範囲また持続時間はいろいろですが、特に、癌による痛みは、耐えられないほどの激しいもので、痛みのために病人は体力や気力をますます消耗してしまいます。しかし、最近では、麻酔学の進歩によって、癌の痛みも大分和らげられるようになってきました。

けれども、この不快な痛みも、実は私たち人間にとって必要なものなのです。というのは、もし痛みの感覚がなければ、私たちは病気や怪我をしても気がつかず、そのために治療が手遅れになる恐れがあるからです。したがって、痛みは病気や怪我を私たちに知らせる大切な警告の役目を果たしているのです。

霊、たましいの痛み

痛みにはもう一つの痛みがあります。その痛みは医者にはどうすることもできない痛みです。それは、霊、たましいの痛みです。私たち人間のからだは脳から手足まで、すべて物質でできています。しかし、人間が、人間として生きるということは、物質によって構成されている部分が生きて働いているからだけでなく、たましい、霊が生きて働くことによるのです。霊の働きは、私たち人間が自分という存在は何か、永遠とは何か、神とは何か、善悪とは何かなど、目に見えないけれども非常に大切なものに対する思いを起こさせるだけでなく、その思いを正しい方向に導くことにあります。人間が他の生物と異なる点はここにあるのです。このことを聖書から見てみたいと思います。

神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼ら

に、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。

（創世記1・26）

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

（創世記2・7）

神が吹き込まれたいのちの息、それが私たち人間の中にある霊です。なぜ神はこのように人間を特別に造られたのでしょうか。それは、神の被造物の中で、人間を最も親しいものとして愛し、ご自分との交わりの対象にしようと思われたからです。霊はそのために必要なものでした。

罪のために死んだようになった霊は痛みを感じない

しかし、このようにして神が人間だけに備えてくださった霊は、悲しいことに、本来の正しい働きをすることができなくなってしまっているのです。それは、人間が、私たちを愛してくださっている神に背くという罪を犯した結果、霊が死んだようになったためです。

聖書に、

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者……。

（エペソ人への手紙2・1）

とあるのは、そのことです。霊が正しく働かないようになった人間は、神を見失い、何が善いことか、何が悪いことかの判断がつかなくなり、自分の欲のおもむくまま、この世のもの、目に見えるものだけを追い求めて生きることになったのです。そして、罪のために死んだようになった霊は、神のみこころに対する反応も極めて鈍くなり、神のみこころに背く罪を犯しても、痛み、悲しみを覚えることがなくなってしまったのです。

しかし、神は、そのような状態に陥っている人間を、すぐに見放したり、見捨てたりはなさいませんでした。神は私たち人間を、なお愛してくださっているからです。神は、そのような者をあわれんで、私たちの死んだようになっている霊に痛みを起こさせてくださいます。死んでいるような霊に痛みを起こさせるには強い刺激が必要です。神は、私たちを愛されるがゆえに、人の力ではどうすることもできないような、さまざまな身辺に起こる問題や世界の情勢などを通して、霊に痛みが起こるようにされます。それが、神の愛による警告なのです。

やみと死の陰に座す者、悩みと鉄のかせとに縛られている者、彼らは、神のことばに逆らい、いと高き方のさとしを侮ったのである。それゆえ主は苦役をもって彼らの心を低くされた。彼らはよろけたが、だれも助けなかった。この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救われた。

（詩篇107・10～13）

神を無視し、霊の痛みを感じない人は、自分が死の陰に座していることも、悩みと鉄のかせで縛られていることも、全くわかりませんが、神がその人を、死の陰、鉄のかせから救い出そうと、霊に痛みや苦しみを与えられて、その人に自分の力ではどうすることもできないことを悟らせてくださるのです。その時、はじめて霊は目覚め、神以外に解決してくださる方、助けてくださる方はないと、へりくだって神に助けを呼び求めるようになるのです。そして、霊の痛みによって、はじめて私たちは神に対して罪を犯したことを知ります。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっ

ています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。

（ローマ人への手紙7・18～20）

この善とは、私たちを造り、子のように思っておられる神のみこころを知り、そのみこころに従うことを喜ぶことです。しかし、罪のために、その神に従いたいと思っても、自分中心の思いや行動が先になってしまうので、それを霊が痛みとして感じるのです。

霊の痛みに対する人間の対応

それでは、霊に痛みをおぼえた時、人間はどのようにしてその痛みを和らげようとするでしょうか。ある人々は、善行をしたり、神の戒めである律法を守ろうとすることによって、霊の痛みを止めようとします。しかし、人間は、自分を全く犠牲にしてまで善行をすることはできません。イエス・キリストと一人の金持ちの青年との対話から、私たちはそのことを知ることができます。

ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」イエスは彼に言われた。「なぜ、良い

ことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちにはいりたいと思うなら、戒めを守りなさい。」彼は「どの戒めですか。」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」イエスは、彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。

（マタイの福音書19・16～22）

私たちもまた、この青年と同じであります。究極的な善行とは、自分自身を愛するように隣人を愛することです。それには、イエス・キリストがここで言われたような大きな自己犠牲が伴います。この青年は、自分のふところ、自分の身が痛まぬ程度の善行をしていたので、それをイエス・キリストに指摘されたのです。神の戒めを、形だけではなく正し

く守るということ、神がよしとされるような完全な善行を行うということは、このように極めて難しいのです。

律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。

（ローマ人への手紙3・20）

とある通りです。パウロ自身も次のように、霊の痛みによる悲痛な叫び声を上げています。

私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私はほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

（ローマ人への手紙7・22～24）

霊の痛みを取り除く方法

では、どうしたら霊の痛みを取り除くことができるでしょうか。それは、まず、自分を

愛して霊の痛みを与え、神に対する背きの罪を知らせてくださった神に感謝し、神の前にへりくだって自分の罪の赦しを請うことです。これについて、イエス・キリストは次のようなたとえを引いて言われました。

「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆすする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

（ルカの福音書18・10～14）

取税人は罪を犯したという、霊の痛みを持っていました。そして、正直にそれをこのように神の前に悔い改め、赦しを請うたのです。一方、パリサイ人は、自分を義人であると

自認しており、全く霊の痛みを感じていません。どちらが神によって義と認められたか、言い換えれば、罪を赦されたかというと、すでにおわかりの通り、自分は正しいことをしていると、神の前に誇ったパリサイ人ではなく、神の前に顔を上げることもできないほど自分の罪を悔いていた取税人のほうだったのです。

神は、次のように約束しておられます。

あなたは心を痛め、神の前にへりくだり、わたしの前にへりくだって自分の衣を裂き、わたしの前で泣いたので、わたしもまた、あなたの願いを聞き入れる。

（歴代誌第二34・27）

そして神は、私たちの罪を赦してくださるために、ご自身が大きな痛みを体験してくださったのです。その痛みとは、神のひとり子イエス・キリストに、私たちの咎を負わせて、私たちの罪の身代わりに見捨てる、というものでした。イエス・キリストが、ご自身全く罪のない神の御子でありながら、十字架の上で父なる神に向かって叫ばれた、「神よ。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」ということばは、私たちの罪を身代わりに負って神のさばきを受けてくださったための、本来ならば私たち人間が叫ばなければならない叫びであったのです。

そして、三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ。」と叫ばれた。それは訳すと「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」という意味である。

（マルコの福音書15・34）

預言者イザヤは、イエス・キリストがこの世に来られる約八百年前に、神の御子が私たち人間の罪の痛みを代わって受けられることを次のように預言しました。

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

（イザヤ書53・4～6）

神の御子イエス・キリストは、この父なる神のみこころに従って、この世に私たちのからだと同じ血と肉のからだを持って来てくださり、私たちに代わって十字架の上で血を流

され、肉を裂かれ、死に至るまで痛みを味わわれたのです。私たちの霊は、この神の痛みと、御子なるイエス・キリストの痛みによって、完全に癒されるのです。

神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行ないの中にあったのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

（コロサイ人への手紙1・19～22）

自分で罪を知ることも、そして、その罪から逃れることもできない罪人の私たち人間のために、神はこのように大きな愛の犠牲を払って助け出してくださったのです。

私たち人間には、肉の痛みの感覚とともに霊の痛みの感覚もあります。痛みはつらく、また不快なものですが、痛みは、私たちに病気があることを知らせてくれます。からだに痛みを感じたら、大事にならないうちに早く医者のところへ行って、痛みの原因を見つけて治してもらうことが大切であるように、霊に痛みを少しでも覚えたら、手遅れにならな

いうちに早く自分中心に生きてきたことを心から悔い改めて、霊の癒し主であるイエス・キリストのところに行くことが最も大切です。イエス・キリストは、ご自分のいのちによって、たちどころに痛みの原因である罪を取り除き、霊を生き返らせてくださると同時に、ご自身の永遠のいのちを私たちにも与えてくださるのです。

彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう。わたしは、彼を長いいのちで満ち足らせ、わたしの救いを彼に見せよう。

（詩篇91・15～16）

光を見つめると治る病気

やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。

（イザヤ書9・2）

冬季うつ病

最近、変わった型の病気が米国で報告されました。それは、光を見つめると治るという珍しい病気です。病気の名前は、「冬季うつ病」と言います。この病気の特徴は、冬になると、抑うつ症状が現れ、そのために身体や精神の活動性が低下し、働くのもつらくなりますが、春や夏になると、症状は消えるところにあります。この病気は、緯度の高い地方ほど多いのですが、その理由は、緯度が高い地方は、冬が長く、また、昼が短く、夜が長いために、光の差す時間が短いからであることがわかりました。この病気の原因は、まだ

よくわかっていませんが、脳の中のメラトニンという物質に関係があるらしいのです。すなわち、メラトニンは健康な人では、昼間は濃度が低くなり、夜間は高くなるという、規則正しいリズムを描くのですが、「冬季うつ病」では、そのリズムが乱れていることが証明されています。そして、この病気の最も大きな特徴は、その治療法にあります。つまり、この病気には、薬物ではなく、明るい光が治療効果があるのです。患者に、三千ルクスの明るさの光を毎朝二時間見つめさせますと、多くは一週間以内で抑うつ症状はなくなります。興味のあることに、治療の効果は、ただ光を当てるだけでは上がらず、効果を上げるには光源を見つめさせる必要があることです。そして、光を見つめさせると、メラトニンの分泌のリズムは正常に戻ることもわかりました。

この病気を通して、私たちは、光には不思議な効力があること、そして、光を見つめることが、私たちのからだに良い影響を与えることを知りました。ただし、肉眼で直接太陽を見つめることは、網膜に火傷を起こしますから大変危険です。

神の光を見つめることは霊の健康に必要

光を見つめることの大切さ、これは霊、たましいの健康についても言えるのです。もっ

とも、「冬季うつ病」に効果のある光は、人工的な可視光線、つまり、肉眼で見ることのできる光線ですが、霊の健康に効果のある光は、可視光線ではありませんから、肉眼では見えません。霊の目でしか見ることができない霊的な光なのです。その光とは、万物の創造主にして支配者の神、永遠にわたって生きておられる、義にして愛の神から来る光であり、その神の「生けることば」としてこの世に来られた御子イエス・キリストです。聖書はこう言っています。

神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。

（ヨハネの手紙第一1・5）

すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。

（ヨハネの福音書1・9）

そして、この世に来られたイエス・キリストは、はっきりとご自身が光であることと、その理由を次のように言われました。

わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。

（ヨハネの福音書12・46）

神の御子イエス・キリストは、罪の満ちている暗闇の世界に、光として来られました。何のために来られたのでしょうか。それは、イエス・キリストご自身が言われているように、「自分を罪から救い出してくださる方は、イエス・キリストである」と信じる者が、一人も罪の闇の中にとどまることのないためであります。

霊的闇は人間の罪のために生じた

光に対する闇、これは、人間の罪を現しています。神のご性質は光であります。また、神は愛であり、義であり、善であり、聖であり、真実であります。しかし、私たち人間の性質は、どうでしょうか。私たちが自分の心の中を覗いてみれば、いかに憎しみ、不義、汚れ、偽善、不真実に満ちているかに気づくのではないでしょうか。罪の性質は、このように神とは正反対のものです。この罪の性質は、特別の人だけが持っているのではなく、人間ならだれでも持っています。それは、すべての人間が光である神に背を向け、神に従う代わりに、自分の判断、自分の思いに従って生きるようになったからです。罪という言葉は、本来、「目標をはずす」という意味ですが、まさに人間が、神という真の目標から目を背けて、自分勝手な生き方をするようになったために、闇の中を歩かなければならな

くなったのです。イエス・キリストはこのように神の光からはずれた人間について次のように言われます。

やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。

（ヨハネの福音書12・35）

やみが彼の目を見えなくしたからです。

（ヨハネの手紙第一2・11）

罪のために、霊の目がふさがれると、真っ暗闇となって、神が示される正しい、永遠のいのちに至る道が見失われ、自分の勘を頼りに、手さぐりで正しいと思われる道、まっすぐだと思われる道を探しながら、歩かなければならなくなります。しかし、このようにして歩く人間には、正しいまっすぐな道と思われる道も、悲しいことに永遠の死に至る道なのです。

人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。

（箴言14・12）

放蕩息子に対する父親の愛

しかし、この世の暗闇の中を、自分では見えるつもりで恐ろしい死に向かって、さ迷い歩いている人間を、神はあわれんでくださいました。ご自分に背いて自分勝手に死の道を選んだ人間を、なぜ神はあわれまれるのでしょうか。それは、神が私たち人間を愛しておられるからです。聖書に、有名な、放蕩息子に対する父親の愛の話があります。

ある人に息子がふたりあった。弟が父に、『おとうさん。私に財産の分け前を下さい。』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。

立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。息子は言った。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』

（ルカの福音書15・11～24）

この話は、神と私たち人間についてのたとえです。神のもとから立ち去って放蕩している私たち人間を、神はなおも愛して見捨てずに、ご自分のもとに立ち返るように願っておられます。そして、死の陰の闇の地に住んでいる私たちの上に、いのちの光を送ってくだ

さいました。その光が私たちの心に差し込んだ時に、私たちの盲目であった霊の目は開かれ、その結果、私たちは、はじめて自分が罪の暗闇の中を歩んでいる闇の子であることを知り、そして、その開かれた霊の目で、はじめてその光が私たちを罪の暗闇から光の中に移してくださるために来られた、神の御子イエス・キリストであることを見ることができるのです。

「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。

（コリント人への手紙第二4・6）

このように、神の光によって、はじめて私たちはイエス・キリストが神の御子であり、神が御子を闇のこの世に遣わされたのは、私たちを滅びの闇から、永遠のいのちの光の中に移そうというお考えにもとづいたものであることを知ることができます。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

（ヨハネの福音書3・16～17）

滅びの闇からいのちの光に移されるためには

私たちが滅びの闇の中から、いのちの光の中に入りたい、と心から願うときに、神は、「それなら、わたしが送った光である、わが子イエスを信じなさい」と言われるのです。

あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。

（ヨハネの福音書12・36）

では、神の御子イエスを信じるとはどういうことでしょうか。それは、私たちの罪の代価を御子がご自分のいのちによって支払ってくださったことを信じることです。

あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――

（エペソ人への手紙2・4～5）

闇の中に光として来られたイエス・キリストを自分の救い主として信じた時、その人の霊は、生き返って元気になり、イエス・キリストの光を受けて、その顔は喜びと希望に輝

くのです。「闇の子」が「光の子」になったからです。

彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。

（詩篇34・5）

光の子は自分が光となって輝くのではない

ここで注意をしなければならないのは、イエス・キリストを信じ受け入れた者は、自分が光となって輝くのではないということです。イエス・キリストは、ご自分を信じて光の子となった者に対して、次のように言われました。

あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを枡の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

（マタイの福音書5・14～16）

ここでキリストが、「あなたがたは、世の光です」と言われたことを、「自分は光の子だ

から、頑張って世の光として輝かなければならない」と誤解する人がいます。もし、私たちが自分の力や努力で光になれたら、神も御子キリストも必要ありません。光の子は光の中に移され、光に照らされています。しかし自分自身が光を発するのではありません。人間は光源にはなれないからです。光源はイエス・キリストです。私たちは、光源であるキリストに目を向けたときに、キリストの光を反射させて輝くのです。イエス・キリストが信じる者を燭台にたとえられたのはそのことです。キリストを信じる者の務めは、光源であるキリストを皆の目に見えるよう、高く掲げて、光を反射させることにあります。イエス・キリストに救われ、光の子として、いつも希望と喜びと平安に輝いていること、それをここでキリストが言われているのです。

また、もし、光の子が、キリストから目をそらし、この世の闇に、あるいは自分自身に目を向ければ、前に述べた「冬季うつ病」のように、霊が落ち込んでしまいます。言わば「霊的冬季うつ病」になってしまうのです。したがって、「霊的冬季うつ病」にならないために、光の子どもでも、絶えず光源であるイエス・キリストを見つめて歩むことが大切です。

いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。

そして、この光であるイエス・キリストから目を離さなければ、自分の身の上や回りに何が起ころうとも、恐れることはなくなります。光が私たちの恐れを取り去ってくださるからです。

（詩篇36・9）

主は私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。

（詩篇27・1）

光のある間に光を信ぜよ

さて、イエス・キリストは、このようにも言われました。

まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。

（ヨハネの福音書12・35）

このことばは何を意味するのでしょうか。それは、神が闇のこの世に送られた光は、いつまでもこの世にあって光を放つのではなく、光として世を照らされたイエス・キリストはやがてこの世の罪をさばくために来られるということです。

人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行ないに応じて報いをします。

（マタイの福音書16・27）

「人の子」とは神が人になられたイエス・キリストのことです。

そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。

（テサロニケ人への手紙第二1・8～9）

そして、この世は暗黒となり、罪に汚れたこの世は終りが来ます。

主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。

神は、罪に汚れた闇の世界を終わらせた後、新しい、聖い、天地を創造されると宣言されました。

（ペテロの手紙第二3・9～10）

見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。先の事は思い出されず、心に上ることもない。だから、わたしの創造するものを、いついつまでも楽しみ喜べ。見よ。わたしはエルサレムを創造して喜びとし、その民を楽しみとする。

（イザヤ書65・17～18）

ここにあるエルサレムとは、新しい天と地における神の都という意味です。この都の光景と、その都に入ることのできる者について、ヨハネは次のように預言しています。

都には、これを照らす太陽も月もいらない。というのは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。諸国の民が、都の光によって歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。こうして、人々は諸国の民の栄光と誉れとを、そこに携えて来る。しかし、すべて汚れた者や、憎むべきことと偽りとを行なう者は、決して都にはいれない。小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、はいることができる。

（ヨハネの黙示録21・23～27）

「小羊のいのちの書」とは、神の御子イエス・キリストが、ご自分のいのちを捨てて罪から救い出した人たちの名が記されている書物です。自分が神に背を向けた放蕩息子であることを心から悔い改めて、光であるイエス・キリストのもとに救いを求めて来た者の名前を、キリストが自ら書かれたものです。この世で人間的には立派であっても、神を信じない人は、神から見れば義人ではありませんから、この新しい神の都に入ることはできないのです。私たちは、このことを謙虚（けんきょ）な心で受け止めなければならないと思います。そして、すべての方が「あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい」と言われたイエス・キリストを信じて、光の子となっていただきたいと思います。また、イエス・キリストは、すでに光の子とされた人々に対して、来るべき新しい神の都に入ることを確信しつつ、希望を持って光であるご自分を見つめ続けるように、そしてまた、光そのものであるご自分を闇の中にいる人々に高く掲げて歩むように望んでおられるのです。

肉の目の色盲と霊の目の色盲

パリサイ人やサドカイ人たちがみそばに寄って来て、イエスをためそうとして、天からのしるしを見せてくださいと頼んだ。しかし、イエスは彼らに答えて言われた。「あなたがたは、夕方には、『夕焼けだから晴れる。』と言うし、朝には、『朝焼けでどんよりしているから、きょうは荒れ模様だ。』と言う。そんなによく、空模様の見分け方を知っていながら、なぜ時のしるしを見分けることができないのですか。」

（マタイの福音書16・1～3）

色盲とは

どなたも色盲の検査は受けたことがあると思いますが、色盲の検査には色盲表を使います。色盲表には、さまざまな色の、たくさんの小さい円が不規則にちりばめられています。

ちょっと見ただけでは何の意味もない模様のようですが、この中には濃淡さまざまな緑色の小さい円のつながりからなる文字が隠されています。正常の目は、この緑色の小円を他の色の小円と識別して、隠されている文字を読み取ることができますが、色盲の目は、緑色と赤色の見分けができないので、隠されている文字がわかりません。

霊の目の色盲

これと同様なことが霊の目についても言えます。私たち人間は皆同じ自然を、同じ世界を見ています。しかし、この同じ対象も、知識や経験にもとづく目で見る場合と、神に背を向けて自分のことだけ考えていた時には閉じていた霊の目が、イエス・キリストの愛と恵みによって開かれたことによって見る場合とでは、見えるものが違うのです。知識や経験にもとづく目からは、その対象から知識や経験の蓄積である科学的説明を読み取るだけですが、イエス・キリストによって開かれた霊の目からは、同じ対象から霊的説明を読み取るのです。科学でわかることは、物事の機序、メカニズムですが、霊でわかることは、物事の意味です。したがって、霊的色盲であれば、物事の意味を知ることはできませんし、聖書に書かれていることの意味もわかりません。

時のしるしを見分ける目

イエス・キリストは、パリサイ人たちに対して、「あなたがたは空の模様を見分けることを知りながら、時のしるしを見分けることができないのですか」と言われました。人間は、知識と経験によって、つまり、科学的な目で天気が変わるメカニズムを知っているので、ある程度天気の予知が可能です。しかし、霊の目が開かれていなければ、そこから世の終りの時が迫っているしるしを見分けることはできません。

自然界に起こった現象を科学の目と霊の目で見る

聖書には多くの自然現象についての出来事が記されています。その中でよく知られている一つの例をあげます。

主はモーセに仰せられた。「なぜあなたはわたしに向かって叫ぶのか。イスラエル人に前進するように言え。あなたは、あなたの杖を上げ、あなたの手を海の上に差し伸ばし、海を分けて、イスラエル人が海の真中のかわいた地を進み行くようにせよ。

（出エジプト記14・15～16）

そのとき、モーセが手を海の上に差し伸ばすと、主は一晩中強い東風で海を退かせ、海を陸地とされた。それで水は分かれた。そこで、イスラエル人は海の真中のかわいた地を、進んで行った。水は彼らのために右と左で壁となった。

（出エジプト記14・21～22）

この現象は、科学的には非常に強い風が吹いた結果、海水が押し分けられたというように解釈できますが、しかし、霊的には、その現象の中に、全能の神が選ばれたイスラエルの民をエジプトから救い出し、約束の地であるカナンに行かせようとされる、神の意志を見ることができます。

歴史は神のＨＩＳＴＯＲＹ

人類の歴史についても、科学の目で見るのと霊の目で見るのとでは、大きな違いがあります。科学的立場からの歴史の解釈では、ある民族や国家が興（おこ）り、栄え、そして滅びるという歴史現象を、科学的、すなわち政治、経済、思想などの面から分析し、説明します。歴史家の分析はすべてそのような立場からなされ、人間の歴史は人間が造るものであると

説明されます。しかし、霊の目には、人間の歴史は神が造るものであり、神がご自身のご計画によって導かれるものであることが示されます。英語で歴史のことを、History と言うことはご存じの通りですが、この単語は、His と Storyという二つの単語の合成語なのです。His とは、「神の」という意味であります。ですから、History、歴史とは「神の物語」「神の語られたもの」ということになります。

このことについて、イスラエル国家の歴史を例にとって考えてみたいと思います。イスラエルの国は、西暦七十年と一三五年に、当時イスラエルを支配していたローマ帝国からの独立を企てて反乱を起こして敗れ、その結果、イスラエル国家は完全に滅亡し、その後イスラエル民族は世界中に離散してしまいました。しかし、それから約二千年後の一九四八年に、パレスチナの地にイスラエル国家は再建されました。しかも、このイスラエル国家の再建は自力でなされたものではなく、イギリス、アメリカを中心とした西欧諸国の協議の結果生まれたものであります。一つの国が滅んで二千年という永い年月の後に、同じ民族が同じ地域に国を再建するというような例は、他に一つもありません。しかし、これを神の意志によるHistoryとして霊の目で見る時に、このことは不思議でも偶然でもないことがわかるのです。すなわち、神は、ご自分に背いた選びの民、イスラエルをさばいて

国を滅ぼし、イスラエル人を世界中に散らされたのですが、ご自身のあわれみによって、ふたたびイスラエル人を集められたのです。そして驚くべきことに、このことは、はるか昔、モーセに率いられてエジプトを脱出したイスラエルの民が、定住の地カナン、現在のパレスチナに入る直前に聖書に預言されていたのであります。

私があなたの前に置いた祝福とのろい、これらすべてのことが、あなたに臨み、あなたの神、主があなたをそこへ追い散らしたすべての国々の中で、あなたがこれらのことを心に留め、あなたの神、主に立ち返り、きょう、私があなたに命じるとおりに、あなたも、あなたの子どもたちも、心を尽くし、精神を尽くして御声に聞き従うなら、あなたの神、主は、あなたを捕われの身から帰らせ、あなたをあわれみ、あなたの神、主がそこへ散らしたすべての国々の民の中から、あなたを再び、集める。

（申命記30・1～3）

彼らに言え。神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは、イスラエル人を、その行っていた諸国の民の間から連れ出し、彼らを四方から集め、彼らの地に連れて行く。

（エゼキエル書37・21）

しかし、イスラエルの歴史だけが世界の歴史から切り離されて一人歩きすることはあり得ないことです。世界の歴史の中にイスラエルの歴史もあるからです。そして、私たちはイスラエルの国が、聖書の預言通りに再建された事実を通して、人類の歴史は、今も生ける神のご計画に沿って進められており、さらに、聖書に預言されていることは、将来の世界の歴史の上にも必ず起こることをも確信できます。その聖書の預言とは、イスラエルが再建された時は、世界の終末が近いということです。神は、エゼキエルという預言者に次のように言え、と命じられました。

それゆえ、人の子よ、預言してゴグに言え。神である主はこう仰せられる。わたしの民イスラエルが安心して住んでいるとき、実に、その日、あなたは奮い立つのだ。あなたは北の果てのあなたの国から、多くの国々の民を率いて来る。彼らはみな馬に乗る者で、大集団、大軍勢だ。あなたは、わたしの民イスラエルを攻めに上り、終わりの日に、あなたは地をおおう雲のようになる。ゴグよ。わたしはあなたに、わたしの地を攻めさせる。それは、わたしがあなたを使って諸国の民の目の前にわたしが聖なることを示し、彼らがわたしを知るためだ。神である主はこう仰せ

られる。あなたは、わたしが昔、わたしのしもべ、イスラエルの預言者たちを通して語った当の者ではないか。この預言者たちは、わたしがあなたに彼らを攻めさせると、長年にわたり預言していたのだ。ゴグがイスラエルの地を攻めるその日、――神である主の御告げ。――わたしは怒りを燃え上がらせる。わたしは、ねたみと激しい怒りの火を吹きつけて言う。その日には必ずイスラエルの地に大きな地震が起こる。海の魚も、空の鳥も、野の獣も、地をはうすべてのものも、地上のすべての人間も、わたしの前で震え上がり、山々はくつがえり、がけは落ち、すべての城壁は地に倒れる。わたしは剣を呼び寄せて、わたしのすべての山々でゴグを攻めさせる。――神である主の御告げ。――彼らは剣で同士打ちをするようになる。わたしは疫病と流血で彼に罰を下し、彼と、彼の部隊と、彼の率いる多くの国々の民の上に、豪雨や雹や火や硫黄を降り注がせる。

（エゼキエル書38・14～22）

ゴグという名の国が、今の世界のどの国を指しているのかを指摘することはできません。しかし、イスラエルからみて北にある強大な国であることはあきらかです。神は、世界の終末の時に、神に敵対する力としてのゴグとその同盟軍に働かれて、安逸を貪っているイ

スラエルに侵攻するようにされます。イスラエルは侵略されて非常に苦しみ、また、その時に大地震などの災害も起こりますが、最終的には、神がゴグに敵対する軍隊を起こされて、ゴグとその同盟軍は、神に滅ぼされます。

世界の終末の前兆

イエス・キリストは、この世界の終末が近い時には、どのような前兆が起こるかについて、次のように言っておられます。

イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私がそれだ。』とか、『時は近づいた。』とか言います。そんな人々のあとについて行ってはなりません。戦争や暴動のことを聞いても、こわがってはいけません。それは、初めに必ず起こることです。だが、終わりは、すぐには来ません。」それから、イエスは彼らに言われた。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、大地震があり、方々に疫病やききんが起こり、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現われます。」

（ルカの福音書21・8～11）

それからイエスは、人々にたとえを話された。「いちじくの木や、すべての木を見なさい。木の芽が出ると、それを見て夏の近いことがわかります。そのように、これらのことが起こるのを見たら、神の国は近いと知りなさい。まことに、あなたがたに告げます。すべてのことが起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」

（ルカの福音書21・29～33）

以上のように、健全な霊の目で見ると、世界の歴史、民族の歴史の背後には、神のお考えがあること、そして、世界の歴史は、そのお考えの通りに動いていることがわかります。したがって、私たちは、これからの世界の歴史に対する神のみこころが、どのように実施されるのかを知るうえで、現在のイスラエルの国を中心とした世界の動向には、特別の関心と注意をはらう必要があります。

ひとりひとりの人生についての神の配慮

しかし、このことは、世界の歴史に限ったことではなく、人間ひとりひとりの歴史、す

なわち人生にも当てはまることなのです。私たちは人生を自分の知恵や経験によって、目に見えるものだけを頼りに歩いているように思っています。自分の人生は自分が計画を立て、それを造り上げるように思っています。けれども、実はその背後に神のお考え、神の配慮があることが、霊的な色盲のためにわからないのです。

イエス・キリストは、人生の計画を自分の考えによって立てている人について、次のようなたとえを話されました。

それから、人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。そして自分のたましいにこう言おう。『たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』

（ルカの福音書12・16～20）

霊的色盲の人の人生はこのようなものであります。人間の知識や経験によって立てる自分の人生についての予測は、天気予報よりも当てにならないものです。

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（コリント人への手紙第二4・18）

霊の目の色盲は治る

ここに述べられている、見えないものとは、言うまでもなく霊的色盲の目からは隠されている、私たちに対する神ご自身であり、またその神のお考えであります。神のお考えは、私たちに、肉の目で見ることのできる一時的なこの世の幸せではなく、神のひとり子イエス・キリストの尊いいのちと引き替えに与えられる、天国まで続く永遠の幸せを与えようというものであります。しかし、この神のお考えを知るためには、まず、私たちの霊の目の色盲を治さなければなりません。医者は肉の目の色盲は治すことができません。霊の目の色盲も人間の力では治すことはできません。ただ、神が与えてくださる御霊だけが、次の聖書のことばのように、霊的色盲を治してくださることができるのです。

まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。」

（コリント人への手紙第一2・9～11、14）

その御霊は、イエス・キリストを信じる者に、助け主として与えられるものであります。

助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

（ヨハネの福音書14・26）

その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。

（ヨハネの福音書16・13）

私たちは自分の知恵や知識に頼って生きています。しかし、私たちの知恵や知識では聖書に中に隠されている深い神のみこころ、すなわち、神が私たちひとりひとりを愛し、滅びに至る罪から救い出して永遠のいのちを与えようと、御子イエス・キリストを人としてこの世に遣わし、私たちの罪の身代わりに十字架にかけられたことを知ることはできません。霊の目が色盲であるからです。イエス・キリストはこう言われました。

わたしを遣わした父ご自身がわたしについて証言しておられます。あなたがたは、まだ一度もその御声を聞いたこともなく、御姿を見たこともありません。また、そのみことばをあなたがたのうちにとどめてもいません。父が遣わした者をあなたがたが信じないからです。あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。

（ヨハネの福音書5・37～40）

ヨハネはイエス・キリストについて次のように証言しました。

神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである。父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しになった。御子を信じる者は、永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。

（ヨハネの福音書3・34～36）

霊の目が色盲であるかないかは、いのちか滅びかという、人にとって最も重大な問題です。どうかイエス・キリストのもとに行って、霊の色盲を癒していただき、永遠のいのちを得られるよう心からお祈りします。

たましいの健康管理

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。

（詩篇16・8～9）

人間にとって最も大切な健康

「あなたの一番欲しいと思うものは何か、」という調査をすると、必ず「健康」が一位を占めるほど、多くの人は健康が大切であると思っています。健康食品、健康体操など、いろいろな健康法が今日ほど流行しているのを見ても、私たちがいかに自分の健康に関心を持っているかがわかります。そして実際に、多くの人が、病気に罹らないように、より健康になるようにと、健康に良いといわれるいろいろなお茶を飲んだり、無公害食品といわ

れる食べ物を選んで食べたり、また、ウォーキングやジョギングをはじめとする運動や、健康を維持し、増進するためのさまざまな方法を考えて実行しています。

もちろん、健康であろうと努力することは、自分のためにも、回りの人のためにも大変に大切であり、良いことです。けれども、なぜ人はそれほどまでに健康であること、ひいては病気にならないことに気を使うのでしょうか。それは、少しでも長く、元気に生きていたいと思うからです。しかし、そのように、いっしょうけんめいに自分なりの健康管理に努めた結果はどうでしょうか。やはり、人は年相応の老いを体験し、やがては、いちばん恐れている死を迎えなければならないのです。ですから、人の努力による健康管理は、一時的な効果しか期待できず、健康でいられる期間を、ある程度延ばすというほどのものでしかありません。

たましいの健康

さて、ここで全く別の面からの健康管理、すなわち、たましいの健康の管理について考えたいと思います。ふつう、私たちが考える健康とは、真剣に考えてみても、WHOの定義にある、「健康とは、ただ病気でないというだけではなく、身体的にも精神的にも社会

的にも良好な状態をいう」ということになるでしょう。ところが、私たち人間の健康は、それだけでは十分ではないのです。すなわち私たち人間にとって最も大切なものは、霊、たましいが健康であることなのです。

なぜかと言いますと、元来人間は他の生物とは異なり、霊を持った生物、すなわち霊的な存在として造られているからです。

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

（創世記2・7）

神の霊が私を造り、全能者の息が私にいのちを与える。

（ヨブ記33・4）

人間は、からだの中に吹き込まれた、全能の神の息、すなわち霊によって、自然の風物やその移り変わりを通して、また人のいのちの有限性やはかなさを通して、永遠なるものへの思いを持つようになり、永遠なる存在としての神を思う思いが与えられます。

神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。

（伝道者の書3・11）

神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。

（ローマ人への手紙1・20）

すべての人間の霊、たましいは病気の状態

神は被造物の中でご自分に最も近い者として、ご自分の愛の対象として私たち人間をお造りになりました。そして、私たち人間に、神ご自身を知る思いを持ち、ご自分に喜んで従うことがいちばんの幸せであることを知ることができるようにと、霊を与えてくださったのです。しかし、せっかく神が私たち人間に与えてくださったその霊は、正しく働かなくなってしまっています。その原因は、罪と言う病気に罹っているためなのです。私たち人間は、霊が病気になってしまった結果、神の存在も認められなくなり、まして神が私たちを愛してくださっていることも、私たちが神から離れて自分の欲望のままに生きているのを悲しんでおられることもわからなくなってしまったのです。私たち人間は、親の愛を忘れ果てた放蕩児になってしまったのです。

しかし、愛の神は、放蕩児の私たちを見放したり、見捨てたりはなさいません。もういちど、ご自分のところに帰ってきて、親しい交わりを回復することを心から願っておられます。

わたしは誓って言う。――神である主の御告げ。――わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。

（エゼキエル書33・11）

神は、放蕩児が自分が神から離れて、自分勝手に生きてきたことを悔い改めて、神に立ち返ることを心から望んでおられます。

病気の霊は、神によって健康を回復される

しかし、私たちは、私たちの霊が罪によって正しく働かなくなり、病気になっているために、自分のしていることがわからなくなっています。自分が放蕩児であることがわかりません。それでは、神に悔い改めることはできません。神はこのような私たちをあわれんでくださって、私たちの霊から罪を取り除き、病気であった霊に健康を取り戻してくださ

いました。

わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。

（エゼキエル書36・25～27）

「きよい水」とは、神の御霊、聖霊です。聖霊は、私たちに、罪について、罪の赦しについて教えてくださいます。イエス・キリストは次のように言われました。

わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。

（ヨハネの福音書15・26）

その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。

（ヨハネの福音書16・8～9）

しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。

（ヨハネの福音書16・13）

罪のために病気になっていた私たちの霊は、御霊によって生き返り、健康を取り戻し、自分の罪がわかり、はじめて悔い改めることができ、そして、自分では取り去ることのできないその罪を、神の御子イエス・キリストが十字架で身代わりに償ってくださったことを信じ、受け入れることができるのです。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方

のもとに帰ったのです。

（ペテロの手紙第一2・22～25）

このようにして、神の御子のいのちを犠牲にしてまで、私たちの罪に病んだ霊を健康にしてくださる神の愛は、私たち人間には考えられないほど大きく深いものです。

霊が健康である徴候

からだの健康状態が良好である徴候には、食事がおいしい、安眠できる、などがあげられますが、霊が健康になると、次のような徴候が現れます。

一つは神のことばである、聖書のことばをおいしいと思うようになります。聖書は他の本を読むように、人間の頭で理解しようとして読んでも決してわかりません。それは、神のことばを人間の知恵や知識で理解できたならば、人間は「自分は自分の力で神を知った」と高慢になり、自分を誇るようになることを、神が許されないからです。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

（コリント人への手紙第一1・21）

これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。

（コリント人への手紙第一1・29）

神のことばは、人間の知恵で理解できるものではなく、霊で味わうものなのです。しかし、霊が病気であれば、神のことばを食べるどころか、おいしいと思うことはできません。霊が健康であればこそ、神のことばをおいしく味わうことができ、そのことばは霊の糧となり、霊的栄養となります。

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。

（エレミヤ書15・16）

次に、霊の安らぎが生まれ、恐れや不安がなくなります。私たちの人生には、家庭の問題、職場の問題、健康の問題などいろいろな悩み、苦しみがあります。また、明日何が起こるかわからないという不安もあります。しかし、霊が健康であれば、自分のことをだれよりも愛してくださる父なる神、御子なるイエス・キリストに信頼し、自分をゆだねることができるようになります。その結果、霊に平安を与えられて安眠することができます。

イエス・キリストは、ご自身に信頼する者に対して、こう約束してくださいました。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

（ヨハネの福音書14・27）

ダビデ王は逆境に遭っても次のように言うことができました。

主よ。なんと私の敵がふえてきたことでしょう。私に立ち向かう者が多くいます。多くの者が私のたましいのことを言っています。「彼に神の救いはない。」と。しかし、主よ。あなたは私の回りを囲む盾、私の栄光、そして私のかしらを高く上げてくださる方です。私は声をあげて、主に呼ばわる。すると、聖なる山から私に答えてくださる。私は身を横たえて、眠る。私はまた目をさます。主がささえてくださるから。私を取り囲んでいる幾万の民をも私は恐れない。

（詩篇3・1～6）

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、

私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。

（詩篇23・1～4）

このように、霊が健康である人は、何が起こっても神にあって喜びにあふれているので、このような人を通して神はご栄光を現され、悔い改めて神を信じる人々が次々と起こされてきます。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。

（ヨハネの福音書15・5）

そういう人こそ、霊の健康が正しく保たれている人であり、神に喜ばれるものとして神に用いられる器なのです。

霊の健康を保ち続けるためには

それでは、神の御霊によって、イエス・キリストを信じ、健康になった私たちの霊は、その後はずっと健康を保ち続けることができるのでしょうか。残念なことにそれはなかな

か難しいのです。私たちのからだの健康は、体力や免疫力が低下すると、すぐに身の回りに無数にいる病原性の細菌やウイルスに感染して病気になりますが、それと同様に、私たちの霊の健康も衰えると、すぐに私たちを、また罪の病気にしようと、私たちの回りで狙っているサタンのために、霊の健康が犯され、損なわれてしまうのです。ですから、からだの健康を保つためには絶えず体調に留意すること、すなわち、健康の自己管理が大切であるのと同様に、私たちは神の大きな愛によって回復した大切な自分の霊の健康を保つために、絶えず霊の状態に気を配ること、すなわち、霊の健康の自己管理が必要です。それには、いつも自分の霊が、健康か不健康かの徴候を自分でチェックしてみることです。

霊の健康状態の自己チェック

どうして霊が衰えたか自分でその原因がわかっている人、自覚している人は、まだ霊の衰えはそれほど進んでいない状態なので、対応も早くできます。その人は、どうしたら健康になれるかも知っており、すぐに主なる神に、次のように助けを求めることができるからです。

神よ。私の叫びを聞き、私の祈りを心に留めてください。私の心が衰え果てると

き、私は地の果てから、あなたに呼ばわります。どうか、私の及びがたいほど高い岩の上に、私を導いてください。

（詩篇61・1～3）

しかし、自分の霊が衰えているにもかかわらず、そのことがわからない人があります。このような人は重症です。たとえば、霊が衰えているのに、自分の信仰は正しいと、自分の霊的状態に満足しているという徴候は、霊が衰えている証拠です。また、ふたたび神よりもこの世のものを第一にしてしまっているのも、霊が衰えている徴候です。また、何かが起こると、たちまち動揺してしまい、神に与えられた尊い永遠のいのちの確信も失い、神から目を離し、人間の力や判断にすがろうとするのも霊が衰えている徴候です。

霊の衰えの徴候を認めた時は

自覚を伴わない霊の衰えは、そのままにしておくと、どんどん神から離れてしまう危険があります。もちろん、御子イエス・キリストの十字架の贖いを、いったん心から感謝して信じた人を、神は決してお見捨てになることはありません。

主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あな

たを捨てない。」

（ヘブル人への手紙13・5）

けれども、神を信じた人であっても、正しく神につながっていないと、枯れた枝のように実を結ぶことができないばかりか、苦しいときに神に頼ることも忘れてしまいます。そうなると、喜びも平安もなくなってしまうのです。ですから、右に述べたような徴候が自分に認められたら、手遅れにならないように、早く治療することが大切です。霊の治療は、自分の努力や人間の力によってはできません。神に心から悔い改めること、そして神に助けを求めることだけが唯一の治療法なのです。ダビデ王は、自分の罪に気がついた時に、次のように祈りました。

神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。

（詩篇51・1～4）

私たちの霊は生き生きとしているでしょうか、死んだようになっているでしょうか。私たちを造られた神は、私たちを心から愛し、ご自分のそばに置いて、永遠の交わりをしようと思っておられます。人間にとって、それが最も幸せなことだからです。前にも述べましたように、神は、罪によって死んでいたようになっていた私たちの霊を、御子イエス・キリストのいのちと引き替えに生き返らせ、まことの健康を与える道を備えてくださったのです。私たちが、神のこの恵みと愛に心から感謝して、神が提供してくださった御子のいのちによる衰えた霊の治療を受け入れれば、生き返って健康になった霊によって神との交わりが回復されるのです。その時はじめて、からだの健康も、実は自分の欲を満足させるためにあるのではなく、私たちを愛してくださっている神に従い、その神に喜ばれるように生きるために与えられていること、そして、その目的のために、からだの健康を管理することが大切であることを知ることができるのです。

環境破壊は人の力では阻止できない

地はその住民によって汚された。彼らが律法を犯し、定めを変え、とこしえの契約を破ったからである。

（イザヤ書24・5）

今日ほど、環境問題に人々が関心を持ったことはありません。その理由は、環境破壊が、地球的な規模でどんどん進んでいることに、皆が危機感を覚えるようになったからです。そこで、これから地球環境の破壊について、まずその原因と現状、人間の知恵による対応策とその限界について考え、次に地球を含めてこの天地宇宙を創造された神は、これをどのように対処されようと考えておられるかを、聖書から見ることにしたいと思います。

地球環境破壊の原因と現状

現在、地球の環境破壊は、地球の温暖化と気候の変化、集中豪雨と洪水、熱帯雨林の消

失、森林の枯死と砂漠化、オゾン・ホールの出現、野生生物種の絶滅などの形をとって、加速度的に進みつつあります。どうしてこのような環境破壊が起こり、しかも急速に進んだのでしょうか。それは、飽くなき欲を満たそうとする人間活動の結果です。人類は、より豊かさ、より便利さ、より快適さを得るために、言い換えれば、自分の飽くことを知らない欲望を満たすために、生産と消費を拡大して来ました。それが、地球資源の乱開発による環境破壊と、大量の排出物、廃棄物による空気、水、土壌などの汚染を招いたのです。これらについて、もう少し詳しく見てみましょう。

膨大な量の化石燃料の燃焼によって、人類は莫大なエネルギーを得ました。その見返りとして起こったのが地球の温暖化でした。すなわち、化石燃料の燃焼により、大気中に排出された二酸化炭素ガスは地球を覆い、地表面からの熱の放散を妨げ、その結果、地球の気温は次第に高くなっています。これによって地球に気候の変化が起こり、各地に豪雨や洪水が頻発するようになり、また植物相、動物相などの生態系が大きな影響を受け、さらに熱波やマラリヤなどの熱帯性の感染症の分布が拡大することによって、人間の健康にも大きな影響が出るようになりました。また、地球の温暖化によって、南極や北極の氷が溶解して海面の水位が上昇し、島や沿岸の低地が水没する危険も警告されています。

また、化石燃料の燃焼により大気中に排出された、大量の二酸化硫黄や窒素酸化物などのガスが、大気中の水蒸気に溶けて運ばれ、これらのガスを排出している地域から、はるか遠く離れた地域に酸性雨や酸性霧となって降り注ぎ、北米、カナダ、ヨーロッパなど地球各地の広大な森林を枯死させ、あるいは、湖沼の魚を死滅させています。

地球上には熱帯地方をはじめとして各地に広大な森林があります。人類はその森林を伐採して広大な農地や放牧地、大量の薪炭燃料や紙の原料のパルプを手に入れました。しかし、その見返りとして得たものは、生態系の荒廃、貴重な動植物の種の絶滅であり、また、二酸化炭素の吸収源である森林の減少は、地球の温暖化の原因である二酸化炭素の増加を招き、森林の乱伐による森林の保水力の減少は、洪水の発生や砂漠化の原因となりました。二酸化炭素の貴重な吸収源としての熱帯雨林は、年々本州の半分に相当する面積が消失しており、また、毎年九州と四国を合わせた面積が砂漠化しています。

熱冷媒用のガスとしてすぐれた性質をもっているために、大量に生産され使用されたフロンやハロンによって、人類は生活の快適さを手に入れました。しかし、その見返りとして、廃棄されたこれらのガスが成層圏まで上昇し、地上の生物を有害な紫外線から保護している成層圏のオゾン層にオゾン・ホールと呼ばれる穴を開け、その結果、太陽からの有

害紫外線が大量に地上に降り注ぎ、人間の健康や動植物に被害を与えるようになりました。オゾン・ホールは、はじめは南極の上空だけに見られましたが、今や地球上空の広い範囲に観測されるようになりました。

かつて、この地球は、神が創造された時には、調和のとれた、美しい、完全な世界でした。神は、ご自分が造られた天地万物をご覧になって満足されたとあるように、それは神のみこころに適う出来栄えでした。

そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。

（創世記1・31）

その美しい天地、世界を汚し、破壊したのは人間であります。神の被造物である動物、植物は、人間の悪のために苦しんでいます。聖書はこのように言っています。

いつまで、この地は喪に服し、すべての畑の青草は枯れているのでしょうか。そこに住む者たちの悪のために、家畜も鳥も取り去られています。

（エレミヤ書12・4）

それは恐怖と化し、荒れ果てて、私に向かって嘆いている。全地は荒らされてし

まった。だれも心に留める者がいないのだ。

（エレミヤ書12・11）

地球は、その住民である人間に荒らされ汚されました。神のみこころに従わず、神のご命令を自分の都合の良いように変えて生きて来た人間に、汚され破壊されました。人間は、神の造られた美しい地球を、世界を、神のみこころに従って管理するように命じられたのに、それに背いて、自分の欲のままにむさぼり荒らして来たのです。

神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。

（創世記1・26）

神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

（創世記2・15）

人間の知恵による対応とその限界

人類は、この環境破壊の大きさにやっと気づき、危機感を覚えるようになりました。一九七二年に国連の「人間環境会議」では、人間の力が地球の環境に対してはかり知れない害をもたらしつつあると指摘し、「今や地球環境の保全は、世界平和と並んで人類にとって至上の目的となった。人間の英知をもってすれば、人類の必要と希望に沿った環境で、より良い生活を達成することができる」と結論しています。しかし、はたして人間の英知によって、地球環境の破壊を阻止することができるでしょうか。たしかに理論的には可能です。その方法とは、世界中の国々が、世界中の人々が一致して、生産を大幅に縮小し、また、生活水準を大幅に引き下げること、さらに、人口の増加をゼロに押さえることです。しかもこれらの対策を直ちに徹底的に実施することです。けれども、これが実行不可能であることはだれの目にも明らかです。なぜならそれは、人類がいったん手にした豊かさ、便利さ、快適さを手放すことを意味するからです。身近に例をとれば、私たちの生活から車や冷蔵庫やクーラーやストーブを手放すことができるでしょうか。電気やガスを使わずに生活できるでしょうか。

環境破壊を防ごうという呼びかけに対して、だれ一人反対する人はいないでしょう。しかし、そのために、自分が犠牲を払わなければならないと知ると反対します。人間の生まれつきの性質が、自己中心であり、常に自分中心に考え、行動する生き方をしているからです。環境破壊は、エコロジーの問題であると言われますが、私はエゴロジーの問題だと思います。一九七二年の「人間環境会議」から二十年後の一九九二年に、リオデジャネイロで「地球サミット」が開催されました。この二十年の間に、はたして人間の英知によって地球の環境は改善されたでしょうか。現実はその逆です。「地球サミット」でも環境改善のための多くの具体策が提案され、それらは宣言に盛り込まれました。しかし、たとえば開催国のブラジルは、地球に生きる人類にとって欠くべからざる酸素の大きな供給源である、熱帯雨林の宝庫アマゾンの開発を規制しようというサミットの提案を、それは国内問題であるという理由で拒否しました。また、アメリカは、地球温暖化の主因である二酸化炭素を減少するために設定した、各国が遵守すべき排出濃度基準を、経済発展を阻害するという理由で受け入れに反対しました。このように、国のレベルでも、各国それぞれの自己中心的態度のために、総論は賛成だが各論は反対、つまり、地球環境の破壊は防止されるべきだが、そのために自国の犠牲は払いたくないという結果になり、地球環境は改善

されるどころか、ますます破壊が進むことになるのです。

創造主なる神のお考え

では、創造主なる神は、このような状態の地球についてどのように考えておられるのでしょうか。神はご自分が創造されたこの地球が、人間の自己中心の欲、すなわち聖書でいう罪のために汚され、破壊されて行くのを黙認しておられるのでしょうか。神は決してそのまま見過ごすことはなさいません。なぜなら、神は完全な方、聖い方ですから、その神が造られた天地、地球も完全で聖くあらねばならないからです。神は汚れたものはすべて取り除くと言われました。

わたしは必ず地の面から、すべてのものを取り除く。――主の御告げ。――わたしは人と獣を取り除き、空の鳥と海の魚を取り除く。わたしは、悪者どもをつまずかせ、人を地の面から断ち滅ぼす。

（ゼパニヤ書1・2～3）

そして神は、人間によって汚され、破壊された古い世界に変えて、新しい、聖い、完全な世界を造ると宣言されました。

見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。

（イザヤ書65・17）

古い、汚れた天地が終り、新しい、聖い天地が始まるのはいつでしょうか。それは神だけがご存じですが、古い、汚れたこの世界が終局を迎える前には前兆があるから、それを見落とさないようにとイエス・キリストは言われました。

イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょう。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょう。」そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たわけではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。

（マタイの福音書24・3～8）

これらの現象は、まさに今日、私たちの目の前に起こっています。したがって、世の終りがいつ来ても不思議はありません。しかし、私たちはその日がいつであるかを気にするよりも、私たち自身が、古い、汚れた世界とともに滅びるか、それとも新しい、聖い世界に入れるかを心配すべきではないでしょうか。では、神が造られる新しい天地に入れる人はどんな人でしょうか。入れない人はどんな人でしょうか。聖い天地に入れる人は、神に義と認められ神によって聖くされた者だけです。神を無視し自分を義としている者は、神から罪に汚れた者と見なされて、聖い天地には入れないのです。では、罪に汚れた者はどうしたら聖くなれるのでしょうか。そのために何をしたらよいのでしょうか。自分の努力では聖くなれません。聖くなるためには、生まれ変わらなくてはならないのです。イエス・キリストは、ニコデモというユダヤ人の指導者の質問に、次のように答えられました。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいって生まれることができましょうか。」イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に

はいることができません」。

（ヨハネの福音書3・3～5）

「生まれ変わる方法はただ一つ、水と御霊によってだけです」と、イエス・キリストは言われました。「水」とは、自分の欲を満たすことが罪であること、自分を義とすることが罪であることを認めて悔い改めることを意味します。また、「御霊」とは、その罪から自分を救い出してくださる方がイエス・キリストであると信じる者に、神から与えられる、私たちの霊を生まれ変わらせてくださる助け主であります。

人間の英知と努力は、地球環境破壊の破局の時を、多少は先に延ばすことはできるかもしれません。しかし、人間が自分の力で地球を救おうとするのは、癌の末期の患者に延命措置を行って、いのちを数日か数週間先に延ばすのと似ています。むしろ、私たちのすべきことは、自分の罪が、神の造られた美しい地球を汚し、破壊したことを認めて、神の前にへりくだって謝罪することではないでしょうか。神はその人を、イエス・キリストのいのちの代価によって赦してくださり、義と認めてくださいます。神はそのために御子イエス・キリストをこの汚れた世に送ってくださり、神の創造される新しい天と地に入ることのできる道を備えてくださったのです。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

（ヨハネの福音書14・6）

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネの福音書3・16）

あばら骨の役割

そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので彼は眠った。それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。

（創世記2・21～22）

あばら骨が、胸をおおっている細い骨であることは、だれでも知っています。しかし、このあばら骨が、他の骨とは違う特別の骨であることは、聖書を通して、はじめて知ることができるのです。これから、そのことについて考えてみたいと思います。

神の創造のわざとして造られた人間

神は、天地万物を創造されましたが、創造のわざの最後に造られた被造物が人間でした。神である主が地と天を造られたとき、地には、まだ一本の野の灌木もなく、まだ

一本の野の草も芽を出していなかった。それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである。ただ、霧が地から立ち上り、土地の全面を潤していた。その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。神である主は、東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。

（創世記2・4～8）

神は、このようにして、まず人間のからだを土地のちり、すなわち物質でお造りになった後、その中にいのちの息を吹き入れてくださったとあります。神にとって人間が特別の被造物であるのは、まさにこの点にあります。神のいのちの息は、人間の中に与えられている霊です。霊は、神と人間との親しい交流のために欠くことのできないものです。そして、人間が生きるということ、言い換えると人間としての存在の意味は、この霊があることによるのです。なぜ神は私たち人間にご自分との交わりを求められるのでしょうか。それは、ご自身が造られた私たちを子どものように愛しておられるからです。そして、そのために、私たちと、父と子の人格的な親しい交わりをするのに必要な霊を与えてくださったのです。

神はまず男を造られ、次にその助け手として女を造られた

神が造られた最初の人間は、アダムでした。アダムは男でした。神は、アダムをエデンの園に置いて、そこを耕させ、またそこを守らせておられましたが、その後、神は、アダムに妻を与えようと思われました。男が一人でいるのは良くない、彼には助け手が必要だと思われたからです。

その後、神である主は仰せられた。「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」

（創世記2・18）

「彼にふさわしい助け手」とは妻のことであります。神はアダムの助け手である妻をどのように造られたかは、冒頭の聖書の箇所に述べられています。神は、アダムのあばら骨を取って一人の女をお造りになり、その女をアダムの妻とされたのです。ここで、あばら骨が特別の骨であることがわかります。

男のあばら骨から女を造られた理由

しかし、どうして神は、女を造られるのに男のあばら骨をお用いになったのでしょうか。からだの骨は他にもたくさんあるのに、その中からあばら骨を選ばれた理由はどこにあるのでしょうか。それには、まず、あばら骨の特徴を解剖学的な視点から考える必要があります。第一に、あばら骨は胸廓を形成している骨です。胸廓は籠のような形をしていますが、その中には心臓や肺が入っています。心臓も肺も、数分でも止まれば人間は死んでしまいますから、いのちにとっては最も大切な臓器といえます。その、いのちにとって最も大切な臓器を外部から守っているのが、あばら骨なのです。第二に、あばら骨は骨の中で最も弾力性のある骨です。人間は肺を通してからだに酸素を取り入れ、二酸化炭素を外に出します。そのためには呼吸をしなければなりません。そして呼吸には、胸廓の働きが大変重要です。つまり息を吸い込む時は胸廓をふくらませ、息をはく時は逆に胸廓をしぼませるのです。あばら骨に弾力性があるのはこのためです。あばら骨は、骨の中では、か細い、弱い骨ですが、このあばら骨がなければ、たちまち大切な心臓は傷つき肺はしぼみ、人間は生きることができなくなります。

夫婦における妻の役割

以上に述べた、あばら骨の特徴を考えますと、神が特に男のあばら骨から女を造られ、その男と女を夫婦とされたということの意味は大変深いものであることがわかります。

神は、男にとって、ふさわしい助け手が必要と思われたから、女を造られました。そのふさわしい助け手が、あばら骨から造られたのです。あばら骨の特徴は、その人のいのちのために最も重要な臓器を外部から守り、また、その人の呼吸に合わせて動く弾力性にあると言いましたが、夫婦における妻の役割は、夫の状態に合わせて共に生きることのできる、夫のふさわしい助け手となることであり、それが夫と妻を造られた神のご目的なのです。

しかし、悲しいことに、あばら骨の役割を果たしていない妻が多いことは事実です。夫の良き助け手であるどころか、夫を支配している妻、夫に従わない妻、夫を無視している妻、夫を軽蔑している妻、夫を憎悪している妻などの妻が多くいるのではないのでしょうか。このような妻は、夫のいのちを守るはずのあばら骨が、反対に夫の心臓を突き刺したり、夫の呼吸に合わせてしなうのとは逆に、夫の胸を締めつけて苦しめ、窒息させてしま

います。

神は男も女も、夫も妻も、公平に愛しておられる

このように言うと、「それは男尊女卑の考え方である。女が男に、妻が夫に従属するというような考えのために、昔から多くの妻が暴君的な夫の犠牲になって苦しんで来たのではないか。聖書は男尊女卑の古い時代に書かれたものであり、現在の男女平等、男女同権の時代には通用しない。しかも聖書には、神は愛の神と書かれているのに、その神がどうして男と女を差別するのか、おかしいではないか。」と反発される方も少なくないと思います。しかし、神は男尊女卑などという不公平なことをなさる方でしょうか。決してそのような方ではありません。人間をご自分に似た者として造られた神は、男も女も平等に愛しておられます。神は男も女も差別なく愛して、平等にイエス・キリストによる救いを提供しておられるのです。

ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。

（ガラテヤ人への手紙3・28）

夫婦における夫の役割

神のことばである聖書の言うことが男尊女卑でない証拠に、夫に対して聖書は次のように命じています。

夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。

（エペソ人への手紙5・28）

夫は自分の妻に対して義務を果たし、同様に妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。妻は自分のからだに関する権利を持ってはおらず、それは夫のものです。同様に夫も自分のからだについての権利を持ってはおらず、それは妻のものです。

（コリント人への手紙第一7・3～4）

夫たちよ。妻を愛しなさい。つらく当たってはいけません。

（コロサイ人への手紙3・19）

夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。

（ペテロの手紙第一3・7）

このように、夫は妻を自分と同じように愛しなさい、夫は妻が弱い者であることをわきまえなさい、夫は妻を尊敬しなさい、夫のからだは妻のものです、と戒めているのです。

神は、創造の時から人間の結婚の意味を、以上のようにはっきりと示してくださっています。

神の秩序を破った人間の罪の結果

神はご自身のお考えによって、順序正しく天地万物を造られました。すべてのものをお造りになった後に、神はそれらのものをご覧になって非常に満足されました。みこころにかなった出来栄えだったからです。

そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。

（創世記1・31）

天体をはじめとし、地球の生態系に至るまでのすべてのシステムが、一糸乱れずに整然と運行されているのは、この神の秩序に従っているからであります。しかし、その神の秩

序を破ったのが、神が最も愛して造られた人間でした。人間は、神が定められた男と女、夫と妻の間における秩序を、自分を造って愛してくださっている神を認めようとしない罪、自己義認、自己主張、自己中心という罪によって破壊してしまったのです。その結果は、神の秩序のもとにあって、夫は自分のからだの一部として妻を愛し、妻はあばら骨として夫に従うという、一心同体であるべき夫婦が、お互いに自己主張を通そうとして争い合い、憎み合い、そのあげくには離婚にまで進むことになるのです。わが国では、離婚の件数が年々増加していますが、その根本原因はまさに神の秩序に反した、自分の思い中心の結婚にあるのです。

神の御子イエス・キリストも、離婚は父なる神の定められた結婚についてのみこころに反するものであると、次のように言われています。

イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」

（マタイの福音書19・4～6）

結婚とは、このように神の定められた神聖なものなのです。

神の秩序にもとづく正しい人間の姿としての結婚

また、最近は、男も女も、自分の自由が拘束されるとか、煩わしいとかの理由で結婚をしない独身者が増えています。これも神のみこころに反するものです。人がひとりでいるのはよくない、と神が言われたのはその意味です。男だけ、女だけで生きることは、神が造られた人間としては不完全だからです。神のみこころは、人間が結婚によって、男と女がお互いに補い合い、助け合い、一心同体となって生きることなのです。これが、神の秩序にもとづく人間の姿です。そして、夫婦が一心同体となって生きるために、最も重要なこととして、聖書はさらにこう述べています。

すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。

（コリント人への手紙第一11・3）

ここに神の秩序のもとにある人間の正しい姿が示されています。すなわち、夫婦がお互

いに向き合っている横並びが正しい夫婦の在り方ではなく、父なる神をかしらとし、その次に御子なるイエス・キリスト、次に夫、次に妻、次に子どもという縦並びの順序が、神の秩序のもとにある人間の正しい姿であるということなのです。このためには、まず夫も妻も、それぞれが、自分は神に背き自己中心の罪の中を歩んでいた者であることを心から悔い改めて、神がこの世に遣わされた御子イエス・キリストを信じ受け入れ、そして喜んで従おうと決心することが必要です。

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。

（ヨハネの手紙第一4・9～11）

イエス・キリストも次のように言われています。

わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。

（ヨハネの福音書15・12）

イエス・キリストは、神でありながらご自分のいのちを十字架の上で犠牲にまでして、私たちを罪の滅びから救い出してくださったのです。そのはかり知れないほどの大きな愛を知り、その愛を心から感謝して受け入れた時に、はじめて神の秩序に立ち返った夫婦として、イエス・キリストをかしらとして仰ぎつつ、夫は妻を自分のように愛することができるようになり、また、妻は夫のあばら骨としての役割を感謝しつつ夫を愛し、夫に従うことができるようになるのです。神は、ご自分の秩序に従い、神の御子をかしらとして互いに愛し合う夫婦を祝福して、神の恵みとしての喜び、希望、平安そして完全な一致を与えてくださいます。

医者に治せない病気

［一九八六年十月・軽井沢保育園保護者連合会講演会にて］

今日皆様にお目にかかれてお話ができることを感謝しております。遠い所からおいでになった方もいらっしゃるようですが、私も昨夜東京からまいりました。せっかく皆様がお忙しいところをおいでくださって私の話を聞いてくださるのですから、何かおみやげになることをと思って考えてまいりました。御承知のように私は医者でございますけれども、今日お話いたします中で、ぜひとも聞いていただきたいと思うことがあります。これは恐らく他のどんな医者も話したことがない病気、恐らくはじめてお聞きになる病気だと思います。その病気について、またその治療はどうしたらよいか、ということもぜひ知っていただきたいと思います。

日本は大変豊かになってまいりました。何でも欲しいものが手に入るようになりました。食べ物でも衣服でも手に入る。では、あと残っているもので何が欲しいか、と考えました

時に、最後に残るものは健康です。健康を自分のものにしたい、それと似たようなことですが、長生きをしたい、長寿を手に入れたい、と思うようになってまいります。アンケートなどで調査しましても、そういう答えが一番多いのです。日本人の寿命は世界一で、最近の統計では男が平均七十五歳、女性が八十歳です。今まで日本が目標にしていた長寿国というのは北欧諸国、スウェーデンやデンマークですが、今やこれらの国々を追い越して世界のトップであります。

男七十五歳、女八十歳というのは、生れたばかりの赤ちゃんがこれから平均してどのぐらい生きられるかということを予測して出したものですから、たとえば私は六十歳になろうとしておりますが、この私が七十五歳まで生きるということとはちょっと違うのですけれども、いずれにしても、平均余命、平均寿命が大体その国の健康度を測る大きな物差しになります。その点で日本はすでに健康も世界一である、と言ってもいいのですね。

どうしてそうなったかと申しますと、かつてあったいろいろな伝染病で死ぬ人がほとんどいない、今死ぬのはほとんど成人病といわれる病気によるのです。また生れる人も昔に比べて少ない、少なく生んだ赤ちゃんの死亡率が減った、少産少死というパターンに日本がなってまいりました。

それに伴って起こっている問題が人口の老齢化であります。お年寄りの割合がどんどん増えております。老人についてはいろいろな定義がありますけれども、私どもは六十五歳以上を老年といっております。ちなみに、統計で見ますと、この老人の人口に占める割合が今十％です。ところが、西暦二千年になりますと、老人の割合は十六％になります。さらに、二十年後にはなんと二十二％が六十五歳以上の人で占められるということになるのです。このように大変老齢化が進んでいます。

かつて私たちがアメリカやヨーロッパに行きますと、何と老人が多いのかと目につきました。しかし、今私たちが日本の街を歩いておりますと、老人の方々の姿が非常に多い、昼間街を歩いている方、電車やバスに乗っておられる方にご老人が大変多いですね。このままの少死が続きますと、ますます老齢化の傾向が顕著になってまいります。

ところでいっぽう、私も毎日医学部に通勤しておりますけれども、大学病院の待合室を見ますと患者さんが一杯です。これはどこの病院でも同じで、患者さんが溢れています。長寿国でありながらなぜそんなに病人が多いのかと申しますと、一つは、今は誰でも病気になればすぐに医療が受けられるという体制ができているからです。昔はなかなかかかれなかったお医者さんにすぐにかかれる、またそのように患者さんの意識も高まってきてい

る、少し悪くなったら医者に診てもらうということが徹底してきた、というのも事実です。

ですから、長生きにはなってきたけれど、健康な人が増えているかというとそうではない、自分はどこか悪いのではないかという思いを持っている人がずいぶんいます。健康と病気の境目はなかなかつけにくいのですが、言わば半健康、あるいは半病人という人々が多くなってきております。私たち医者もいっしょうけんめいに診察、治療しているのですけれど、なかなか病気が減らないのです。

では病気の中身は昔と今とはいったいどう変わっているのかと言いますと、これが様変わりしております。昔怖かった病気、どんどんその病気で死んだというような病気は少なくなっている。たとえば、伝染病で言いますと、天然痘、これで死ぬ人が昔は大変多かった。しかし今では天然痘の病人は世界中で一人もいなくなりました。一九八〇年にＷＨＯ、世界保健機構から、世界中の国々から天然痘が消滅した、撲滅されたという宣言が出されました。皆様方ひとりひとり種痘の跡がありますが、もう種痘する必要がなくなりました。天然痘がなくなったからです。ところが天然痘のウイルスは存在する。どこにかと申しますと、いろいろな研究所の試験管の中に生きております。それだけなのです。病気としてはもうないのです。

かつて日本では結核が蔓延(まんえん)して、多くの若い人が死にました。また私たちぐらいの年齢では、死なないまでも、若い頃結核にかかって長い間療養した人はたくさんいらっしゃいます。しかし今、結核で死ぬ人は極めて少ないのです。らいも怖い病気でしたけれど、今では非常に少なくなりましたし、らいで死ぬ人はなくなりました。癩ってもごく軽症で、しかも治ります。そのように、昔、怖い怖いと言われていた病気は今や姿を消しつつあります。

ところが、このように医学が進歩し抗生剤のような薬ができたから、伝染病はなくなったかと言うとそうではありません。新しい伝染病が出てきました。一番新しくて恐ろしい伝染病はエイズであります。これは前はなかったのです。私たちは習ったこともありません。ごくごく最近、十数年前にアフリカのある地方で風土病として発生しました。それからアメリカやヨーロッパに蔓延(まんえん)して、今や日本にも入って来ました。エイズというのは日本語では後天性免疫不全症候群(こうてんせいめんえきふぜんしょうこうぐん)というちょっと難しい名前で呼ばれております。一言で言えばこれはウイルスで起こる病気です。このウイルスは、人間の血液の中のリンパ球に取り付いてこれを破壊してしまう。リンパ球というのは、外から侵入してくるウイルスやかびや細菌などを殺す大切な役目を果たしているものですから、それが全部やっつけられる

と、人間は無抵抗になってしまいます。恐ろしい病気を持った微生物から全く裸になってしまうのです。

軽井沢の空気は日本でも有名なほどきれいですが、それでもここに培地を置いて、十五分間蓋を開けておいてから閉じて、孵卵器に入れて培養しますと、そこにいろいろな細菌がわーっと生えてきます。こんなきれいな空気でもそうなのです。私たちはそういう空気を吸っているのですが何ともないのです。というのは皆さんのからだの中に生れつき、赤ちゃんでも誰でもそういった神様が与えてくださった防衛機構がありますから、病気にならないわけです。けれどもその機能をやっつけるウイルスが現れましたから大変です。今のところ我々はそれに対して闘う武器を持っていません。感染して発病しますと百％死にます。エイズのウイルスで死ぬのではありません。罹った人たちは無抵抗の状態になっていますから、吸い込んだ微生物が全部その人のからだの中で繁殖してそのために死ぬのです。エイズで死ぬ一番の原因はかびによる病気です。かびで肺炎が起こります。ふつう、かびで肺炎になるということはほとんどありません。ところがエイズに罹ると肺にかびが繁殖し、それによって呼吸困難が起きて、苦しみながら死ぬわけです。

エイズはしかし、今のところ特殊な感染経路をとっております。セックスによって、ま

た特に同性愛によって感染します。ニューヨークのマンハッタンには同性愛の人がたくさんいるそうです。そのためにマンハッタンにおける死亡率の第一位はエイズになりました。癌などではないのです。

また、日本で今増えている病気の一つにB型肝炎、血清肝炎というのがあります。このB型肝炎のウイルスを持っている人は日本で二百万から三百万人と言われており、もっと増えてくるでしょう。このウイルスも非常にしつこいのです。普通のウイルスは熱を加えると死にますが、このウイルスは死なない。血液を通して感染しますから、輸血が大変怖い。ですから輸血は、血液の中にこのウイルスが入っていないかどうか、よく調べてから行いませんと、病気は輸血によって治っても、輸血をしたためにB型肝炎に罹る可能性があります。この病気は何が怖いかと言いますと、だらだらと長引いてついに肝硬変を起こす、あるいは更に肝臓癌が発生する場合もあるからです。

まだたくさんあります。心身症という病気、これは昔もありましたけれど、今は非常に増えています。心身症とは、一口に言いますと心で起こるからだの病で、ストレスなど心理的原因でからだにいろいろな症状が出てくる病気です。人間社会が大変複雑になり、仕事の上や人間関係の上で負担が多くかかってきて、その荷が重すぎると、それが引き金に

なって起こります。普通、皆様方がからだの病気だと思っているものの中に心身症である場合がたくさんあります。高血圧もそうですし、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、糖尿病、心筋梗塞その他いろいろな病気がストレスが原因で起こります。ですからこれらの症状が出た時に、ただその病気の治療をするだけではなくて、原因である心の問題を解決しなければなりません。お子さんでも心身症に罹る方がたくさんあります。

また、うつ病、抑うつ症、これは昔あまりなかった病気ですが最近はずっと増えています。これも世の中が急速に変化して、いろいろな意味での心の重荷が重くのしかかり、それが引き金になって起こっている場合が多いと言ってもいいと思います。まだいろいろありますが、一つの病気が少なくなるとまた新しい病気が出てくる、社会環境や心理的な環境、人間関係のあり方が変わってくると、どんどんと新しい病気が出てきます。

このように医学と病気は追いかけごっこをしているわけです。私たちは常にベストを尽くして研究をし、診療をしておりますけれども、医学の限界をいつも感じます。結局私たち医者がしていることは、ちょうど消防士が火事が出た時に火を消しますが、それと同じことをしているわけです。火事が起こると、それ行け、といって火事場に行って火を消します。するとまた別の所に火の手が上がってまた駆けつけて消す、それが大体医学、医療

のやっていることであります。何が起こるかわかりません。そうやって、私たちはあちこち火を消して回っておりますけれど、人間として誰しも持つ夢である不老不死、いつまでも若くいつまでも死なない、これが医学で達成できるかと言いますと、それはできないのです。その研究はしておりますけども、はっきり申しあげてそれはできません。

臓器移植というのがあります。悪くなったら取り換えて健康な臓器を移植する方法です。現在は腎臓でこれができるようになり、心臓や肝臓でもできることがわかってきました。では悪くなくなればそうやってどんどんと取り換えて行けばいいじゃないか、と思われるかも知れませんが、そうしてもたかだか数年あるいは十数年死が先に延びるだけです。というのは、いろいろな研究でわかってきましたが、人間の寿命の限界は、どんなに医学が進歩し、医者が努力しても百二十年なのです。これ以上はだめなのです。人間のからだを構成している細胞のいのちは、最も良い条件に置いておいた場合でも百二十年以上は生きられない。細胞の中に仕組まれている機構、これを変えることはできないのです。ですから、細胞から成り立っている人間がどんなに努力してもそれ以上は生きられない。これは聖書の中で、人間の寿命を百二十歳と神様が決められたと書いてあるのに一致しています。ずっと昔に書かれたことが、今最先端の医学でわかってきたのです。不思議なことだと思

います。

このように、私たち人間は生まれたら必ず死ぬことがわかっています。今日いらっしゃった皆様方はまだ若いお母様が多いですし、お子さん方はもっと小さいですから、まだ死ということについてあまりお考えになっていないかも知れません。しかし、私たちは生まれたその日からどこに向かって歩いて行くかと言いますとひとりひとり必ず死というゴールに向かっているのです。後戻りはできない。いやだからもう一度お母さんのお腹の中に戻ろうと言ってもそれはできません。皆用意ドンでスタートしているのですから。ゴールは死です。それははっきりしているのです。ですから、結局、医学というのは延命の学問、命を先に延ばすということしかできないのであって、死に対しては全く無力なのです。どんな病院でも、もうこの患者さんは駄目だ、ベストを尽くしたけれどもこの患者さんは死ぬのだということがわかった時、医療従事者は死に対して何の対策も持っていないのです。ただ、最近ごくごく短い間の延命の道具がありまして、生命維持装置と言いますが、もうだめとわかった患者さんにそれを付けますと、無理やりにその装置で心臓を動かし、無理やりに肺の中に空気を押し込みますから、もう脳は完全に機能を停止した後も、装置を付けているために顔色が良くて何となく生きているように見える。大変にお金のかかる装置

ですが、これを付けるともう医者はなかなかこれを止められません。愛する人がまだ生きているように目の前に横たわっている。ご家族は医者に、「どうでしょうか」とお聞きになります。医者は、「装置で心臓は動いていますけれど、止めれば……」となるわけです。昔は医者はご臨終です、と言いましたが、今はその装置が動いている間医者はご臨終ですとは言えません。けれども、その患者さんの脳はすでにどろどろに溶けてしまっていたという例が解剖してみると少なくありません。

そこで、こんなことではいけない、と医者従事者たちが考えたことが一つあります。末期医療と言いまして、もうその患者さんにどんな医療の手を尽くしてもだめだ、必ず死ぬ。けれども放って置くことはできない、なんとかしてその人が安らかに死ねるように援助をしようという考え方であります。これは最初はイギリスでスタートしたのですが、ホスピスというのがその施設です。

死んで行く人がどんなことを考え、どんな苦しみ悩みを持っているかを、看護をするうえでの参考のために調べ、分析しましたところ、そういう人々に四つの苦しみがあることがわかりました。一つは身体的な苦痛、もう一つは精神的な苦痛、それから経済的なあるいは社会的な苦痛というものもある、そして最後に霊的な苦痛があるということがわかっ

てきました。

身体的な苦痛はまだ医学が助けることができる、たとえば癌の患者さんの場合など痛みが非常に激しく耐えられなくなります。それに対しては鎮痛の手段が講じられます。この分野は大変進歩して来ており、薬で痛みを和らげることができます。それから、精神的な苦痛あるいは社会的、経済的な苦痛、これはご家族や看護する方たちが暖かく接すること、できるだけ本人の希望をかなえてあげるような配慮をすることなどである程度和らぎます。

問題は霊的苦痛です。これは何かと言いますと、私たちは死ぬとわかった時に、死んだらいったいどうなるのか、どこに行くのか、ということがとても心配になります。元気なうちはあまり考えないかも知れませんが、「どうもだめだ、自分は助かりそうにない」と思うようになりますと、口には出さなくてもほんとうに思い悩むようになります。大変怖くなるのです。ある人はその時神様のことが頭に浮かぶでしょう。「ああ自分は生きている間に悪いことをしてしまった」、「私は回りの人々の心をあんなに傷付けてしまった」「あの人をとても憎んだ」、「他人には知られなかったけれどもこんな許されないようなことをしてしまった」、「うわべはきれいに見せかけていたけれど、ほんとうの自分はとても醜い思いを持って生きてきた」などといろいろな思いが心に浮かぶでしょう。そして「こ

んな自分はいったい死んだらどうなるのだろうか、地獄に行くのではないだろうか、とても恐ろしいことが待っているのではないだろうか」と死が怖くてどうしたらいいのかわからなくなってしまいます。

しかし、これに対して医者や看護婦が、「そんなことを心配する必要はありません、絶対に大丈夫です」と言えるでしょうか。言えません。何の保証もないのですから。そこで医者は逃げます。「大丈夫です、あなたはまだまだ死にません。きっと治りますよ」などと言うわけです。けれどもそれは嘘ですね。患者さんはわかるのです、自分がもうだめだと言うことが。そんな大事な時に医者や看護婦に逃げられた患者さんは、もんもんとして苦しみながらこれに対する何らの解決も与えられないままに死んで行きます。

ホスピスが日本でなかなか普及しないのは、その問題に解決を与える人が誰もいないからです。この苦痛や恐怖は医学では治せない病気に人間が罹っていることからきているのです。いったいそのような苦しみや恐れはどんな病気から起こってくるのかということについてこれから少しお話ししたいと思います。これは「罪」という病気なのです。この病気に人間が罹っていますから、死に対する恐怖が出てくるのです。実は、この病気は人間が一人残らず持っています。

これから先を続ける前にお話ししておかなければならないことがあります。我々人間は肉体を持っております。その中に精神、あるいは心というものがあります。けれどもこの二つは人間だけでなくて動物も持っております。しかし、人間だけが肉体の中にある心の更に中に持っているものがあります。これが霊なのです。動物でも、痛いとか嬉しいとか、あるいはこの主人について行こうとか、これはしてもいいか、いけないかということはわかります。それは動物も心、精神を持っているからです。判断力と感情と意志は心の働きです。ですから、これら三つのものは人間だけではなくて犬にもあります。

ところが、良心というのは霊の働きです。良心のとがめ、良心のうずきというものを皆様も感じられたことがあると思いますが、不思議なことに、これを持っているのは人間だけなのです。ここでなぜ人間が罪という霊の病気、これは遺伝病でありますが、これを持っているかということについてお話しいたします。皆様はご存じかどうかわかりませんが、人間は創造主である神様によって造られたものです。もちろん、私たち人間を造ってくださった全知全能の神様は宇宙とその中にある万物をお造りになりましたが、人間を特別に愛してご自分に似る者としてお造りになったのです。

人間のいのちは尊いとよく申しますね。なぜ尊いのでしょうか。先日ある高名な分子生

物学者にお会いしました時にその方が「人間のいのちは尊い」と言われました。ところが、その方は、「人間のいのちが物質からできていることを研究の結果証明できた」と言われるのです。それで私は、「なぜ物質でできている人間のいのちが尊いのですが、ダイヤモンドと同じ意味で尊いのですか」とお聞きしますと、「そうじゃないなあ、なぜ尊いのかはわからない、なぜかわからないけれど人間のいのちは全宇宙よりも尊い」と言われるのです。そんなおかしなことはありませんね。世界一流の分子生物学者です。その方がなぜかわからないと言われるのです。ただ漠然とそう感じておられるだけなのです。これはお気の毒ですが、この方が神様をご存じないからであります。

なぜ人間のいのちが尊いかと申しますと、それは神様がご自分に似る者として造ってくださった、そのことは聖書に書いてありますが、それだから尊いのであります。ご自分に一番近いものとして造ってくださったからなのです。神様は人間がご自分に応答できるように、私たちに霊を与えてくださったのです。良心は霊に属するものであります。本来人間というものは神様を認識し神様に応答できるものとして造られたのに、我々はそうしていないですね。神様をどこかへやってしまって自分を神様にして生きている、自分の思いを中心にして生きています。自分が正しいと思っています。他人に対して、あの人が憎い

とか、あの人がうらやましい、などと人を憎んだりねたんだりするのは、自分と比較して自分を中心にして考えるからです。人間は一人残らず皆そうです。私もそうです。ここで言う罪は法律上の罪とは違います。法律上の罪はCRIMEと申しますね。しかし、神様に背いた罪はSINであります。最初の人間アダムとエバが神様に背いて以来その子孫であるすべての人間の中に罪という病気が入ってしまったのです。遺伝病と申しましたのはこのことです。この病気の症状は、自分中心ということであります。

普通、皆様方のお考えになる罪は法律上の罪、人殺しとか盗みとかそういうのが罪だとお思いでしょう。ですから罪と言われると、「とんでもない、私は罪など犯したことはない」とおっしゃるでしょう。けれどもそのような罪も結局は先ほど申しましたような、憎しみ、ねたみなどという自己中心な思いから出ているに過ぎません。ですから、CRIMEの水源はSINです。神様を無視して人間が自分中心に生きるのがSINという罪なのですから、誰一人として私は絶対に自分中心に生きたことはないと言えない以上、皆が罪を持っていることになるわけです。

「そんな、憎しみやねたみなどというものは皆持っているから大したことはないじゃないですか」とおっしゃるかも知れませんが、神様にとっては正しいものは正しい、正しくな

いものは正しくないのです。神様は完全な方ですから、少しでも罪があればそれを見過ごすことはおできになりません。ですからSINという罪、病気といってもよろしいのですが、これにかかったら死ななければなりません。その死というのは単なる肉体の死ではないのです。SINという病気の結果は永遠の滅び、永遠の苦しみであると聖書に書いてあります。これが怖いのです。皆さん死ぬ時に大変恐れを感じるのは、自分の中の良心がそれをささやくからであります。

健康というのは病気でない状態を言いますが、ほんとうの健康とは今私がお話ししたことでおわかりと思いますが、神様と私たちが正しい関係を回復した状態、これがほんとうの健康であります。ただからだや心が病気でないという状態を指すのではなくて、罪という病気が私たちの中から取り去られた時、私たちはほんとうに健康になります。そしてこれは医者にはできないことなのです。医学には手が出せないのです。

ではいったい、どんな方法でこの罪という病気を取り除くことができるのでしょうか。皆様も知っておられると思いますが、加持祈禱（かじきとう）というのがありますね、神仏を拝む。ところがそんなことではだめなのです。人間が作り出した神や仏をいくら拝んでも無駄です。宗教ではだめです。なぜなら宗教はみな人間が考え出したものだからであります。あるい

は良心の痛みを感じますといっしょうけんめいにいろいろな善行に励む、そして「自分で良いことをしたから赦されるだろう」と思うでしょう。でもだめなのです。SINという罪はそんなことではなくなりません。なぜかというと、自分の心の中に良いことをしたという思いが起こる、これは自分を誇る高慢の罪です。やはり自分中心です。「それじゃ、どうしようもないじゃありませんか。いったいどうしたらいいのですか。滝にでも打たれましょうか」とおっしゃるかも知れません。でもそんなことをしてもだめなのです。

解決の方法がたった一つあります。私たちを造ってくださった神様だけがこの罪という病気を治療してくださる唯一の方なのです。人間が考え出した八百万（やおよろず）の神々ではありません。まことの神様は全知全能の創造主ただお一人です。この神様は私たちの目には見えませんね。けれどもこの美しい軽井沢の自然は人間が造れるものではありません。私たちが素直な心になって自然を見た時に、神様がお造りになったことがわかります。小さな名も知れないような花が誰も見る人もいないようなところで咲いているのを見る時にも、ああこれは神様がお造りになったのだ、と素直に思うことができます。どんな小さな花や草一つでさえも人間が造り出すことはできないのです。

私たちのからだも大変複雑にできておりまして、調べれば調べるほど驚異です。そうい

う私たち人間は、単なる一学説にしか過ぎない進化論で説明できるようなものではありません。人間は猿から進歩したなどというものではありません。神様の造形の極致なのです。宇宙を見てもそうです。宇宙飛行士が宇宙へ飛び出して行って地球を見た時に、驚嘆しました。誰がいったいこんな素晴らしいものを造ったのかと。宇宙と言いましても、私たちの見ている宇宙は全宇宙のほんの一部にしか過ぎません。私たちは宇宙の果てまで行ったことがありません。いくらロケットを飛ばしてもそれは有限な所までしか行かれません。私たちの住んでいる地球は太陽系の一つの惑星にしか過ぎません。たくさんの太陽系が銀河系を構成していてその銀河系がかぞえきれないほどあります。それらのものが全く秩序正しく動いている。そのようなものをいったい誰が造り、また動かすことができるでしょうか。神様にしかできません。そのような神様が小さな虫から私たちまで造ってくださったのです。神様は永遠に存在される方で、「私はアルファでありオメガである」とおっしゃっています。初めであり終りである全能者、造り主である神様以外に私たちのどうしても取り除けない罪を取り去ってくださる方はないのであります。

ではどうやって取り除いてくださるのでしょうか。実はもうすでに取り除いてくださったのです。それも大変驚くべき方法によってなのです。それは私たちの死に至る恐ろしい

罪をご自分の身に負って身代わりになって死んでくださるという方法によって取り除いてくださったのです。それがイエス・キリストの十字架なのです。「何だ、二千年も前のユダヤの出来事じゃないか」とおっしゃるかもしれません。けれども全宇宙をお造りになった神様にとって日本も外国もありません。人間はどこの国でも変わりないのです。

イエス様は約二千年前に歴史上目に見える姿でこの世に来てくださった神様なのです。宇宙をお造りになる前から存在された子なる神であり、すべての物を父なる神のみこころに従ってご自分でお造りになったのです。もちろん、私たち人間もです。このことは聖書にはっきりと書いてあります。その神様が背いた私たちの罪をご自分の身に負って始末してくださるために、十字架にかかって身代わりの死を遂げ、三日目によみがえって、信じる者に罪の赦しと永遠のいのちを与えてくださっているのです。

聖書でイエス様はいろいろな教えを説いていらっしゃいますが、イエス様がこの世においでになった最も大きな理由は、私たちの罪を十字架の上で始末してくださるためだったのです。このことを信じないで、ただイエス様の教えだけに目をとめても罪は赦されません。よく教会に行っても、十字架のことがわからない、ほんとうに罪が赦されているということを受け入れることができないとおっしゃる方があります。けれども、聖書を神様か

らの言葉として自分でよくお読みになれば、この十字架の救いがどんなに素晴らしいことであるかおわりになるはずです。ご自分の中にある罪の性質を認めて、イエス様の十字架による罪の赦しを感謝して受け入れるならば、その時からあなたは罪という永遠の滅びに至る病から解き放たれ、この世のいのちが終ってからは天国で永遠に生きる者となることができるのです。これが、聖書による神様の約束であります。人間の約束ならば破られることもあるかも知れません。けれども神様の約束は絶対に破られることはないのです。

このようにして、霊的健康が与えられますと、たとえ癌になって余命いくばくもない状態になっても、まだイエス様の救いを受け入れない霊的な病気の人に比べて、非常に平安があります。私の知人や友人のキリスト者で、はっきり末期癌であると知らされても、考えられないような安らかな心で恐怖も不安もなくこの世の生活を送り、痛みの中にあってさえも心に平安を持ち、その上回りの人々に多くの励ましさえ与えて、天に召された行った方々が何人もあります。医者や看護婦たちも驚くほどでありました。私自身もいつ死んでも少しも恐れません。なぜなら、イエス・キリストによって罪が赦されている、罪という永遠の滅びに至る病気から解放されていると確信している私は、この世を去った時に必ず天国に行くことができることをも確信しているからです。

聖書から少しお読みいたします。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

（ヨハネの福音書5・24）

これはイエス様がおっしゃったことばですが、神様を信じた者はこの世に生きている時からすでに永遠のいのちを持っている、死からいのちに移っている、とあります。大変すばらしい神様の約束です。

今日はいろいろな病気についてお話しいたしましたけれども、いちばん怖いのは罪という病気であること、この罪という病気をイエス様を信じて取り去っていただき、どんなことがあっても恐れずに、平安な気持ちで喜んでこの世を生きて行っていただきたいと思います。そして、ご家族の皆様が救われて、子どもの教育とか家庭の内外の問題などいろいろな思い煩いからも解き放たれて、ほんとうの意味での健康な状態になってお過ごしいただきたいと心からお祈りする次第です。

ハイテク医療の中の生と死
――医の倫理を模索する中で――

［東海教育研究所発行　望星一九八八年三月号掲載］

高度化する医学・医療

先日、ある新聞に、九十七歳のおばあさんが自宅の池に入水したという記事がありました。七十七歳の長男夫婦との三人暮らしで、経済的にも家庭的にも、特に問題はなかったそうです。ただ、「これ以上長生きして、息子夫婦に迷惑をかけたくない、早くお迎えが来ないと息子に先を越されてしまう」と口ぐせのように言っていたそうです。

この事件は、私には、科学技術の発達した高齢化社会の象徴的な出来事のように思われます。さまざまな医療技術の発達のおかげで、日本は世界一の長寿国になりました。昔から医学や医療は少しでも人間のいのちを延ばすことを使命としてきましたし、現在でも一般にはそう考えられています。しかし、このお年寄りの例は、ただ単に長生きをするとい

うことが、人間にとってほんとうに幸せなことなのだろうか、という疑問を私たちに投げかけているように思います。

科学技術の発達は、社会に深く浸透し、これまで人間の手の届かなかった領域、たとえば、宇宙や深海の中まで人間の活動範囲を広げてきました。その一分野として、医学・医療や生物学の進歩は、人間のいのちを引き延ばすだけでなく、これまで神の摂理にゆだねられていた、この世に誕生する以前のいのちにさえ、直接手を加えることのできる技術をもたらしました。遺伝子操作や体外受精、男女生み分けなどの技術は、この世に現れる前のいのちにかかわる問題として、また、脳死や臓器移植は、死をめぐる問題としてさまざまな論議を呼んでいます。私たち人間は、誕生以前から死までのあらゆる段階で、人間の生命にこれまでになく強力な操作を加えることができるようになったのです。科学技術の進歩・発展による恩恵、という名のもとに、今や人間は自分たち自身の改造に向けて手を加え始めたと言えるでしょう。

生命倫理が求められる背景

こうした生命操作についての諸問題は、医者だけにまかせておくわけにはいかないとし

て、各国とも、それぞれの分野の衆知を集めて生命倫理（バイオエシックス）に関する諸基準・諸指針を作成したり、医療機関に生命倫理委員会あるいは医の倫理委員会が設置されるようになりました。わが国でも多くの大学病院や医療機関に倫理委員会が置かれ、さまざまなケースについての判断と解決が求められるようになってきました。しかし、倫理委員会が機能することですべての問題が解決するわけではないと私は思います。生命倫理に関する問題は、医療を施す側の問題としてばかりでなく、医療を受ける人々の問題、言い換えればすべての人間に関わる、極めて重大な問題であるからです。従来、医学・医療における倫理とは、「患者を診察し治療する医師が、医師として当然備えていなければならない資質と良心」という医師の倫理規定に過ぎませんでした。そしてこの医の倫理は、高いレベルの医学知識・医療技術を持つ医師がよい医師であり、患者はその医師の言葉に従うべきものであり、また、少しでもいのちを長らえることが医療の目的であるという、医師と患者の暗黙の了解の上に成り立っていたのです。

しかし、科学としての医学や生物学が高度化し、医療技術が高度化してくるにつれて、医療に関する倫理問題は、医師と患者の一対一の問題にとどまらず、多くの職種の医療従事者や患者の家族も含まれるようになって複雑化し、また、単にいのちを長らえさせれば

よいという、単一的な価値観が変化して、医療に対する要求が多様化し混乱が生じてきました。たとえば、たくさんの管で患者をしばっているように見える延命装置を、はずすかはずさないかという場合、患者本人の意志がわからない時には、医療従事者の使命感と家族の気持ちに微妙な食い違いを生じることもありますし、そこには高い医療費の支払いという経済的問題がからむこともあるでしょう。また、「ぜひ男の子が欲しいから生み分け技術の適用を受けたい」という夫婦の要求に、医療機関はどのように応じたらよいかというケースも考えられるでしょう。

こうして医の倫理には、今や生命倫理の問題も含まれるようになり、医療現場における倫理問題についての基準や指針のほか、広く生命操作に関わる実験研究に対しても指針や枠組が検討されるようになりました。しかし、何が正しいか、間違っているかという人間の判断は、人によっても価値観が異なり、また、それぞれの時代や社会の支配的な価値観に左右されてしまうので、生命倫理の基準や指針も絶対的なものではあり得ません。

生命の尊厳とは

私は生命倫理は私たちにいのちとは何か、生きるとは何か、という根元的な問題を考え

る機会を提供してくれたのではないかと思っています。

いのちが尊いものであるということに反対する人は恐らくいないでしょう。それではなぜ尊いのか、と問われたときに答えられる人はどれくらいいるでしょうか。ある人が、いのちはいのちであるがゆえに尊いのだ、と言ってみてもだれも納得しないでしょう。今や分子生物学の進歩によって、いのちを分子レベルで解明できるような時代になりました。つまり、いのちは物質であることが証明されたのです。では物質であるいのちが他の物質とは比較にならないほど尊いというのはどういうことでしょうか。また、いのちが尊いという時、それは人間のいのちを指すのか、他の生物のいのちも人間と同じように尊いと考えられるものなのか。さらに、こうしたいのちの尊厳とは絶対的なものなのかという疑問もでてきます。また、高度な医療技術は、その提供が限られていて、どの医療機関でも受けることかできるというわけにはいきませんし、経済的にも重い負担がかかるため、貧しい人々は受けられないかもしれません。では、もし医療を受けられる人を選ばなければならないとしたら、どう選べばよいのでしょう。たとえば、この人とあの人のいのちを比較して、どちらが尊いなどと言えるのでしょうか。また、先ほど申しました遺伝子操作や遺伝子診断、体外受精などの技術は、まだこの世に現れていないいのちについて介入する

ことになりますが、その場合のいのちの尊厳とは、いったいどう考えたらよいのでしょうか。

生命倫理の問題解決は聖書にある

多くの人々は、これらの問題の解決のための糸口を哲学や倫理学、神学、宗教などに求めるかも知れません。しかし、私はこれを『聖書』に求めます。あえて宗教とかキリスト教と言わずに『聖書』と言うのにはわけがあるのです。その理由は、いのちの問題は、人間を創造された、真理そのものである神を人間が認め、この神と自分との正しい関係を回復したときにはじめて氷解すると信じるからです。私の言う神とは、多くの宗教が作り出した神々、つまり人間が作り出した八百万（やおよろず）の神々という意味ではなく、天地万物の創造主、生きてご自身の計画を遂行する主権者である父なる神、そして人間の歴史の中に介入し、人間の目に見えぬ神が見える形で人として現れてくださった御子なる神すなわち、イエス・キリストなのです。

『聖書』には、この神と私たち人間との立場、関係というものがはっきりと書かれています。創世記には、神が人間をご自身に似る者として造り、ご自身の息である神の霊を吹

き込んで生きるものとしたと記されています。そして、その人間に対して

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

（イザヤ書43・4）

と言ってくださっているのです。このように、神は他の被造物に比べて、特別の愛をもってご自分と応答する存在として人間を造られたのです。ここに人間のいのちの尊厳性が存在するのです。ですから、いのちの問題を考えるとき、私たちは神によって造られたものとして、神が私たち人間に何を求めておられるのか、と考えることから出発することが大切なのです。それによって、さまざまな問題の解決の糸口も見えてくると思います。

神が人間を造られたことが記してある『聖書』の創世記には、「神が造られた人間以外のすべての被造物を人間に任せる、人間に管理させる」とも書いてあります。このことは、人間が他の被造物を自分勝手に使ってもよいという意味ではなく、神の被造物を神の代理として管理しなさい、ということなのです。ところが多くの人間は、それを自覚することなく、勝手に自分たちの欲望を満たすために使ってもよいのだと思ってしまっています。しかも、人間が科学というものを手に入れてから、その傲慢（ごう）さはさらに加速されて、今日では、神の造られた環境生態系を破壊するまでに至り、その結果が自らの身にはね返るに

及んでいます。このことを医学・医療の面に当てはめてみれば、人間はとうとう科学技術の進歩という名のもとに、自分たち自身の改造に向けて、メスを加えはじめてしまっているのです。すべてのものは神によって与えられたものです。したがって、科学技術もまた神から人間に与えられた知恵です。しかし、その知恵を誤用していることに人間は気がつきません。そして、今日ようやく科学技術がこのままの方向で進んで行くことが、ほんとうに人間の幸福につながるのだろうかという不安が人々の心に湧いて来たのです。それが、生命倫理が求められるようになった所以(ゆえん)です。このように考えてくると、多くの人々は神との関係を正しく認識しないままに、心の中に漠然とした恐れと不安を持っていることがわかります。創造主である神に対する謙虚さを忘れ、人間自身が神であるような錯覚と奢(おご)りに満ちた人間が操作する今の科学技術や医学・医療から、神のみこころに反するような多くの問題が起こってくるのも当然ではないでしょうか。

人間は不完全なものです。「愛」について考えてみても、人間の「愛」は神のような大きく完全な「愛」ではありません。自分がいちばんかわいいと思う「自己愛」を越えることはできないようなものです。しかし、人間は自分が不完全であることを認めようとしないために、さざまな過信に陥り、過ちを犯します。『聖書』のヨブ記に出てくるヨブは、

人間の中では最も正しいといわれた人でしたが、その彼も神のなさったことを批判し、神をさばいてしまうという罪を犯し、結局神の前にひれ伏しました。人知のはるかに及ばない全知全能の神であり、すべてを創造された神の前では、人間は被造物であり、小さく無力なものでしかありません。自らの不完全さと限界を知り、神の恵みによって与えられた日々を、一日一日神の前にへりくだって、神を仰ぎ見つつ感謝しながら生きるときに、神は人の歩みを正しく導いてくださり、恐れと不安から解放して、ほんとうの意味で充実した生を与えてくださるのです。

新しい医学や医療技術も、人間が神から賜ったものであり、神の恵みとして行われるべきであり、また受けるべきであって、人間の自己愛や飽くことのない欲望を追及する手段であってはなりません。医療を施す側の医療従事者も医療を受ける側の患者も、ほんとうに神を畏れ、神に感謝する気持ちをもって、この賜物としての新しい技術を用いなければ神の領域を冒すことになり、その結果、人間は自分自身の身を滅ぼすことになってしまいます。特に医学研究者や医療従事者は、自らが神を演じるような高ぶりを持つことなく、謙虚でなければなりません。なぜなら、医学・医療がどんなに発達し、臓器移植や人工臓器などで悪くなった身体の部分をどんどん取りかえても、結局人間は死ぬからです。人間

の死を止めることはだれにもできないからです。最近、人間の身体を構成している細胞のいのちは、どんなに良い条件に置いた場合でも、細胞の中に仕組まれた機構を変えることができず、百二十年以上は生きられないことがわかりました。これは『聖書』の中で神が、

わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齢は、百二十年にしよう。

（創世記6・3）

と言われたとあることと一致します。不思議なことに、はるか昔に書かれた『聖書』に記してあることが、今の最先端の医学で証明されたのです。

高度化した医学・医療技術によって、人間は自分たちの生と死を、より強く大きく操作できるようになりました。それは人間に利益をもたらす以上に、人間のいのちの尊厳を犯す恐れがあることに、ようやく私たちは気がつきました。そして、その歯止めを生命倫理や医の倫理に求めたのです。しかし、前にも述べたように、価値観の多様化した今日、生命倫理や医の倫理についての考え方や判断基準も人によって、立場によって異なります。また、その時代や社会の支配的な価値観に左右されてしまいます。したがって、いのちの尊厳にかかわる問題解決を、人間の知恵で考える生命倫理や医の倫理に頼っても、そこに

はほんとうの解決はないのです。生命倫理の諸問題の解決は、生ける神のことばである『聖書』の中にあり、聖書こそが生命倫理や医の倫理を考えるうえでの、永遠に変わることのない正しい基盤なのです。なぜなら、人間のいのちの尊厳性は、神が与えられたものであるからです。

退任講演

若き日に汝の造り主を覚えよ

――医学・医療の立場から――

一九九三年二月・東海大学医学部講堂に於て

私が退任講演にこのような題名を選んだことに、多くの方は大変奇異な感をお持ちになったと思います。というのは、このような時には、ふつうは自分の専門領域について、特に自分の研究の歩みについて紹介するのが慣わしだからです。しかし、私があえてこの演題を選んだのは、医学を学ぶ者、医学の研究や臨床に携わる者が、それぞれの道を歩む際の正しい指針として、私たちの造り主を覚えることの重要性を知っていただくことのほうが、ここで私自身のささやかな研究業績をご紹介するよりも、はるかに有意義だと確信したからです。これから与えられたしばらくの時間、私たち医学・医療に携わる者が日常深く関わっている、人のいのちの問題、病気や健康の問題、環境の問題について、神からの啓示として人間に与えられた、神のことばである聖書を通して光を当てて、これらの問題の持つ意味を、すなわち人間のいのちとは何か、生きることとは何か、また、病気や健康とは何か、環境破壊とは何か、医学・医療とは何かを、ごいっしょに考えて行きたいと思います。

創造主

医学を学ぶ者は、人間の構造や機能を知れば知るほど、このような精緻な構造、機能を

持つ生命有機体は、いったい、どのようにして造られたのであろうかと、思わざるを得ません。故松前重義総長は、昭和四十八年四月に、人体科学博物館が清水市三保に開館したことを記念して、『人は何処より来り何処に行かんとするのか』という言葉で始まる詩を作っておられます。故総長直筆のこの詩のレリーフは、現在、同博物館内に掲げてありますが、その詩の中で先生は

人々よ
見よ　人体構造の神秘を
見よ　この作品の微妙さを
見よ　つくられたるものの限りなく人の力に越ゆるを
見よ　この偉大なる造物主の力を

と創造の主である神を認めて、その偉大さを賛美しておられます。聖書を愛読し、また科学者でもあった故総長は、生命の神秘に目を向けた時に、素直にこれを神の創造の業として受け入れ、このように創造主を恐れ、かつ賛美されたのです。

神は、聖書のことばを通して、ご自身の考えや意志、栄光を現されますが、その聖書にあなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに。

（伝道者の書12・1）

ということばがあります。ここで言っている「若い日」というのは、単に年齢的な若さという意味ばかりではなく、明日よりも今日がより若い、すなわち一日でも若いうちに、という意味でもあります。医学・医療従事者にとって、人間を創造した神を知ることが特に必要である理由は何でしょうか。それは、私たちがこの神によって造られた人間のいのちを預かっているところにあります。

人のいのちの尊厳とは

私たちは、よく人のいのちの尊厳ということを言います。医の倫理の基本理念は、人のいのちの尊厳性を尊重することであります。では、なぜ人のいのちは尊いのでしょうか。これについて人は答えられません。しかし、聖書は、その理由について明快に、それは人が神に応答する者として造られたからであると言っています。

聖書には

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

（創世記2・7）

とあります。土地のちりとは、有機や無機の物質を指し、人の中に入った神の息とは、霊、平たく言えば神から与えられた良心と言われるものです。聖書の同じく創世記には、神が魚や鳥、爬虫類や哺乳類などの動物を造られた様子も書かれていますが、神はこれらの動物を造られた時には、人間のようにいのちの息を吹き込まれませんでした。動物と人間との違いはここにあります。動物も生き物ですが、ここで特に、「人は生きものとなった」と言っているのは、神から与えられている生存本能や種を保存する本能だけで生きている動物と異なって、神と応答して生きることこそが人間であるという意味なのです。この霊、良心が正しく機能している時、人は創造主の神を恐れ、その神の意志に従って生きることが正しいことであり、善いことであることがわかります。正しい道徳的、倫理的な判断をすることができます。また、宇宙や自然―これらも神によって造られたものですが―を通して創造主の神を思い、永遠を思い、人とは何者であり、何処から来て何処に行くのかと思うようになります。

聖書には

あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人と

は、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。

（詩篇8・3～6）

とあります。このように、神は宇宙万物を造られ、その管理をご自分と応答できるようにお造りになった人間にゆだねられたのです。

神の秩序とそれを乱すもの

以上のように、神は神の秩序にもとづいて宇宙万物を造られ、それらは神の秩序にもとづいて整然と動いています。私たちは天体の運行や、自然界におけるエコシステムなどを通して、それを知ることができます。神によって創造された世界は完全でした。神は人間に対しても神の秩序に従うことを要求されます。神が造られた最初の人アダムに対しても神は、神の秩序に従うように求められました。ところが、神の命令にアダムは服従せず、自分の欲に従ってしまったのです。アダムのこの不服従は、創造主である神に逆らって神

でもない自分自身を神として、これに仕えたことを意味します。聖書で言う罪とは、まさにこのことであります。そして、人間が自分を神から引き離して自分自身を神としたということは、すなわち神の創造された秩序を乱したことになり、その結果神によって造られたこの完全な世界は、罪ある者となった人間の誤った支配によって、荒らされ、汚され、不完全なものになってしまったのです。そして、神の秩序のもとに整然と働いていたエコシステムも、自分を神とした人間のわがまま勝手なふるまいのために破壊されつつあるのです。

環境破壊の根本原因

今日、地球の温暖化、砂漠化、森林特に熱帯雨林の減少、土壌と海洋の汚染、酸性雨、オゾン層の破壊、野生生物の種の絶滅などの現象を通して見られる地球環境の破壊は、人類の生存に関わる大きな問題として、先進国、途上国を問わず、すべての国で対応策を積極的に進めなければならないところにまで来ています。有名な「蓮の葉のクイズ」というのがあります。池に蓮の葉が浮いています。葉の面積は日ごとに二倍になります。葉が池の全面を覆ってしまうと、池に生息している魚や他の生物はすべて窒息死してしまいます。

もし、蓮の葉が三十日目に池の表面を覆いつくしてしまうとすれば、池の面積の半分が覆われるのは何日目になるか、というのがクイズの問題です。答えは何と驚くべきことに、前日の二十九日目です。現在の地球環境の破壊の状況は、この「蓮の葉のクイズ」に似ています。池が半分覆われるのに二十九日もかかるのなら、残り半分が覆われるのはまだまだ先と錯覚しがちですが、実際には破局は翌日に迫っているのです。

国境を越えて、地球規模で進む環境破壊を防止するには、もはや、これまでのように各国がばらばらに対応しても効果は望めません。昨年の六月に、リオデジャネイロで「地球環境サミット」が開催された目的もそこにありました。地球環境破壊の原因は、窒素酸化物、二酸化硫黄、二酸化炭素あるいはクロロフルオロカーボン、いわゆるフロンなどの大気中への排出増加、有害廃棄物の増加、農薬の乱用、森林特に熱帯雨林の乱伐採などとされています。しかし、これらは皆、表面的な原因に過ぎません。環境破壊の根本原因は、神の秩序を無視し、生産と消費を限りなく拡大し続ける人間の、とどまるところを知らない自己中心の欲にあるのです。今までよりも、あるいは人よりも、より豊かに、より快適にと、限りなく求め続ける私たち人間は、この環境破壊を抑えるために、生産と消費の縮小について、どれだけ真剣になれるでしょうか。たとえば、もしある国の政府が、環境破

壊防止の目的から、経済成長をマイナスに抑え、耐乏生活を国民に強いるという政策を打ち出したとしたら、人々はこの政策を支持し、協力するでしょうか。たちまち反対され、つぶされてしまうでしょう。また、ごく身近なところでも、エネルギー削減と排気ガス減少の目的で設けられたノーカーデイに、私たちはどれだけ熱心に協力しているでしょうか。現実は、むしろノーカーデイのほうが走っている車が多く、道路は渋滞しています。ふだんよりも渋滞が少なかろうと、車で出かける人がたくさんいるからです。地球サミットでも、結局各国の利害の対立のために、大した成果は得られずに幕を閉じました。ブラジルには地球最大の「緑の肺」と呼ばれる熱帯雨林アマゾンがあります。しかし、大気中の二酸化炭素を吸収し酸素を放出する重要な役割を持つこの貴重な地球の肺が、大規模な開発によって年々大幅に縮小しつつある事実は、人工衛星からの写真によっても明らかです。地球サミットではアマゾンの環境保全を求めましたが、ブラジル政府は、アマゾンの開発は自国の問題としてその要求を拒否し、依然としてさかんに開発を続けています。また、アメリカ政府は、サミットで提案された地球の温暖化防止のために世界各国が守るべき二酸化炭素濃度排出基準を、自国の経済発展を阻害するという理由で受け入れに反対しました。このように、自分さえ良ければ、自分の国さえ良ければいいのだという自己中心の思

いが、地球環境破壊の根本原因なのであります。したがって、すべての国のすべての人間が利己中心こそ環境破壊の原因であることに目覚め、地球とそこにあるすべてのものは、神から人間にその管理をゆだねられている大切なものであることを自覚し、これまでの人間の身勝手さを心から悔い改めて、環境保全を最優先課題として取り組まない限り、地球環境の破壊は止まるどころか、「蓮の葉のクイズ」の通りに加速度的に進むことは間違いないでしょう。

ＡＩＤＳ出現の理由

人間が神から離れた結果として、人間自身は不完全になり、神が吹き込まれた霊は正しく働かなくなってしまいました。その人間にもたらされたものは混乱と死であります。神から離れ、神が造られた秩序に逆らって自分を神とした人間はどうなったでしょうか。聖書は次のように言っています。

彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、女は自然の用を不自然なものに代え、同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男が男と恥ずべきことを行なうようになり、こうしてその誤りに対する当然の

報いを自分の身に受けているのです。

（ローマ人への手紙1・22、26～27）

ＡＩＤＳの流行が同性愛者から始まったことに私たちが思いを致した時、この恐るべき病気は、神の秩序を乱した人間に対する神の警告の一つの現れと考えざるを得ません。

ＣＲＩＭＥとＳＩＮ

私は、今まで罪という言葉を何回か使いましたが、ここでこの言葉について少し説明したいと思います。日本語には罪という言葉は一つしかありませんが、英語には罪という言葉は二つあります。一つはCRIMEという言葉で、人に対して犯す法律的な罪を意味し、もう一つはSINという言葉で、いわゆる道徳的な罪であり、つきつめれば神に対する罪を意味します。このSINというスペルをよく見ると、真ん中にIがあります。Iすなわち私、私をいつも中心に置く、神中心であるべきところに自分を置いていること、これがSIN、神に対する罪なのです。私たち人間は皆自己中心です。ということは、皆神に対する罪を犯していることになります。そして、そのような性質を基本的に持っているがために、目に見える形としてのCRIMEを犯すことにもなるのです。私たちはふつう、この目に見え

る形のCRIMEという罪しか意識しませんが、人のいのちに携わる者は特に、「自分は常に自分を中心に置いて考え、行動しがちな性質を持っている」ことを自覚し、絶えず自らを省みることが大切だと思います。

神との共働者

ここで私たちは以上のことを医学・医療に携わる者に向けてさらに考えてみたいと思います。先に述べたように、私たち医学・医療に携わっている者は、神によって造られた人のいのちを預かっています。最初、神によって完全な者として造られていた人間には、病気も苦しみもありませんでした。けれどもその人間が、神に背くという罪を犯したことによって不完全になったために、病気が生じたのです。そして、それをあわれまれた神の愛の一つの業として、人間に与えられているのが医学・医療です。神を信じていようといまいと、神は医学・医療に携わる者をご自分と共に働く者として、ご自分の愛の手として用いて病人を癒されます。十六世紀のフランスに外科の名医として知られたアンブラーズ・パレという医師がいました。パレは止血に血管結紮をはじめて取り入れた医師であります。その彼は『私は包帯をし、神が癒す』という有名な言葉を残しています。名医と言われた

彼は、治療において主役は神であり、自分は単なる脇役に過ぎないことを自覚していたのです。

しかし、自分の力で、自分の腕で、病気を治せると自負している医師は少なくありません。これは言うなれば自分を神とする高ぶった態度です。医学知識と技術の進歩は、これまで治癒不可能な疾病の治癒を可能にするとともに、かつてないほどに人の生と死に深く介入するようになりました。自分を神とする医師や研究者が、この進歩した医学・医療技術を手にする時、人間のいのちの尊厳は侵害の危機にさらされます。近年、医の倫理に対する要望の声が高まっているのは、人々がこの不安と恐れを感じるようになって来たからです。人間は権力、富を手にすると、奢り高ぶって何か特別偉くなったような、特別の権威を持ったような気持ちになり、神を演じるようになります。自分は何でもできる、つまり神になったような錯覚を起こします。その結果は破滅です。「余の辞書に不可能という文字はない」と豪語したナポレオンを挙げるまでもなく、私たちはこのような人間を、過去にも現在もたくさん知っています。しかし、権力や富ばかりではありません。知的財産と言われるように、知識も同様です。

聖書に

知識は人を高ぶらせる。

（コリント人への手紙第一8・1）

とあります。人間が知識を手に入れると高ぶるようになります。言うまでもなく、これは知識が悪いからなのではなく、知識を使う人間に問題があるからです。今日の進歩した医学知識・技術を手にすると、中には自分は人のいのちを、患者の死を左右できる権威を持っていると錯覚する者も出てきます。末期の患者に、患者本人の意思や苦痛も顧みずに、ただ延命だけの目的の治療処置を行うことも、また、末期の患者や家族に頼まれて、故意に患者のいのちを短縮する行為も、どちらも神を無視した高ぶりの罪であり、傲慢の罪です。一九八三年の第三十五回世界医師会総会で採択された、末期疾患に関するベニス宣言の中では、「医師は、末期患者の苦痛から患者を解放するために、患者の合意を得て、苦痛緩和のための薬物投与以外の治療処置を中止することができる」と言っています。また、一九八七年の第三十九回総会で採択された安楽死に関する宣言では、「安楽死は、患者の生命を故意に絶つ行為であり、たとえ患者本人の要請、または近親者の要請にもとづくものだとしても、倫理に反する」とも言っています。これらの宣言は、いずれも患者のいのち、患者の死を左右できるような錯覚に陥りやすい医師に対する自戒から出たものであり

ます。今月十日付けの新聞は、オランダ議会の下院が、医師が末期患者を積極的に安楽死させることを条件付き（患者が末期にあり、耐え難い痛みに苦しみ、死にたいと繰り返し訴えていることなど）で認める法案を、この二月九日に可決したと報道しました。今後、安楽死を巡る論議はますます活発になるでしょう。しかし、私たちは、死は神がその時を決定されるのであって、決して人が、医師が、決めることはできないことを承知していなくてはなりません。

聖書に

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。

（伝道者の書3・1～2）

とあります。人が生まれたり死んだりするのは、ただ神がご自身の権威によってなさることなのであります。

健康は最高善か

また私たち医学・医療に携わる者は、健康こそ最高に善きものであると信じ、それを目

標にします。しかし健康は、はたして最高善でしょうか。ここに『病者の祈り』と題する一人の無名の患者の詩を紹介したいと思います。

病者の祈り

大事をなそうとして
力を与えてほしいと神に求めたのに
慎み深く従順であるようにと
弱さを授かった
より偉大なことができるように
健康を求めたのに
より良きことができるようにと
病弱が与えられた
幸せになろうとして
富を求めたのに
賢明であるようにと
貧困を授かった

世の人々の賞賛を得ようとして
権力を求めたのに
神の前にひざまずくようにと
弱さを授かった
人生を享楽しようと
あらゆるものを求めたのに
あらゆることを喜べるようにと
いのちを授かった
求めたものは一つとして与えられなかったが
願いはすべて聞きとどけられた
神の意にそわぬ者であるにかかわらず
心の中の言い表せない祈りはすべてかなえられた
私はあらゆる人の中で最も豊かに祝福されたのだ
（ニューヨーク・リハビリテーション研究所の壁に書かれた一患者の詩）

彼は力を求めたが代わりに弱さを、健康を求めたが代わりに病弱を、富を求めたが代わ

りに貧困を、権力を求めたが代わりに無力を与えられました。ふつうなら自分の不幸を嘆き悲しみ、自己憐憫に陥るか、あるいは他人をうらやみ、神を呪うのではないでしょうか。けれども、彼はその反対に、自分はあらゆる人の中で最も豊かに祝福された者であると言うことができたのです。これは、彼が病気の苦しみを通して自己中心の思い、願望が砕かれて、霊の目が開かれ、いのちの意味、生かされていることの意味を知ったからであります。

医学や生命科学は生命の、病気のメカニズムを解明するには大いに有用です。しかし、いのちの意味、病気の意味、健康の意味を、そこから知ることはできません。科学の領域は量の世界であり、一方、意味は質の世界、すなわち価値の領域に属するからです。それでは、いのちに、病気に健康に、人生に、すなわち物事に意味を与えるものは何でしょうか。それは、神との肯定的または否定的な関係です。神に従えば、すべての物事は意味を持つようになります。しかし神から離れれば、すべての物事は意味を失います。最近、医療の現場でＱＯＬ、クオリティ・オブ・ライフということが熱心に検討されています。私は、ＱＯＬには二つの要素が含まれていると思います。一つは、ライフという言葉を生活として把握した「生活の質」という意味であり、もう一つは、ライフをいのちとして把握

した「いのちの質」という意味で、患者の幸福度、満足度の高低を言います。この詩を作った患者は、「生活の質」としてのＱＯＬは高くはないでしょう。しかし、「いのちの質」としてのＱＯＬは大変高いと言えましょう。このように、健康はそれ自体が目的ではありません。健康は、いのちそのものが意味を持つ限りにおいてのみ有意義なのであります。

高ぶる波はここで止まれ

生殖医学技術の進歩についても、この技術を臨床に適用するに当たっては、私たちは慎重でなければなりません。神が定められるべき人のいのちの誕生に、大きく介入することになるからです。ここで一つのエピソードを紹介しましょう。

ある一人の女性が、中絶をしてもらおうと産婦人科を訪れました。しかし、その女性には、中絶をしなければならないような医学的根拠は、何も見つかりませんでした。医師は彼女に中絶を思い止どまるように説得しましたが、どうしても承知しません。最後に医師は一言こう言いました。「あなたのお腹の中にいるお子さんが生まれたら、何と言う名前をつけますか」。彼女はこの思いがけない質問に驚いたようでしたが、しばらくしてから顔をあげて、はっきりと「先生、私はこの子を生みます」と答えました。いったいどんな

変化が彼女の心の中に生じたのでしょうか。中絶のことを考えていた時には、お腹の中の子供は彼女にとってただの小さな細胞のかたまりに過ぎませんでしたが、名前は何とつけるかと聞かれた時、お腹の子は細胞の小塊から一人の人格を持った、いのちに変化したのです。このエピソードは、胚や胎児の取扱いについて、とかく安易に考えやすい私たち医療従事者や研究者に対しても示唆してくれるところは大きいのではないでしょうか。

一九八七年の第三十九回世界医師会において採択された、体外受精と胚移植に関する声明の中でも「医師は常に、このような処置によって生まれてくる子供の最善の利益に照らして行動しなければならない」、すなわち生まれて来るいのちの人格を尊重せよと言っています。また、遺伝子操作、遺伝子治療は、人の生殖細胞、つまり精子や卵子に加えてはならない、という約束が守られているのも、医学・医療に携わる者の心の底にある、うっかりすると過去にナチスが行った大きな過ち、すなわち人間改造に手をつけかねないという危機感、神の領域を犯すことに対する恐れが歯止めになっているためです。

一九八二年に、米国コールドスプリング・ハーバー研究所のバンベリーセンターで、遺伝子治療は将来どうあるべきか、何をなすべきかについての会議が開かれました。その時、小児科医であり分子生物学者でもあるセオドア・フリードマンは、「人に対して直接に遺

伝子を操作することは、人間という存在をおびやかすことにならないだろうか。人間の種の自然な流れを変えることにならないだろうか。人類は、自らの遺伝的運命を勝手にデザインし、変更する重荷を引き受けるほどに十分賢いと言えるだろうか」という疑問を提起しています。

聖書で神はこう言っておられます。

ここまでは来てもよい。しかし、これ以上はいけない。あなたの高ぶる波はここでとどまれ。

（ヨブ記38・11）

もし、生命科学の進歩に伴って、医学・医療に携わる者の好奇心がとどまるところを知らず、奢り高ぶる波となって人のいのちに迫るようになれば、人類は破滅します。神の警告を無視した報いが来ます。私の好きな聖書のことばは、

人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいない。

（コリント人への手紙第一8・2）

であります。私はこのことばを、ともすれば高ぶりやすい私に対する神の戒めとして大

切にしています。

主権者の神

これまでに述べてきた神は、単に創造の神にとどまりません。聖書で、神はご自分がどのような神かを私たちに明らかにしておられるので、ここでいくつかご紹介します。

わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はいない。
（イザヤ書44・6）

わたしは全能の神である。
（創世記17・1）

わたしはあなたをあなたの名で呼ぶ。
（イザヤ書45・4）

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。
（イザヤ書43・4）

わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである。

（イザヤ書57・15）

このように、神は全知全能にして永遠に生きておられるだけでなく、私たちを高価で尊いとまで言って愛してくださり、個人的に名を呼んでくださり、心砕かれた人とともに住んでくださる、人格を持った神であります。この神はキリスト教やユダヤ教などというような、いわゆる宗教の神ではありません。宗教は人間の考え出したものであり、したがって宗教の神は人間が造った神、何もできない偶像であるに過ぎません。しかし、ここで言う神は、人間が造った神ではなく、それとは逆に人間を造り、しかも愛してくださる神です。したがって主権は人間にあるのではなく神にあります。聖書の神は主権者の神です。聖書で神を主なる神と呼ぶのはこのためです。先ほどの松前重義先生の詩の冒頭に、「人は何処より来り何処に行かんとするのか」とありましたが、その答えは神が主権者であることを認めた時に与えられます。

主なる神は肉眼で見ることはできません。しかし、私たちが高ぶりを捨て、謙虚に自分が不完全な者、取るに足りないちっぽけな者であることを認めた時に、死んでいた霊の目が開かれて、その霊によって自分が神の前にいることを知ります。もし不完全な人間が、生ける全知全能の神の前に置かれていることを知った時、その者は神を恐れざるを得ませ

ん。

聖書に

造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。

（ヘブル人への手紙4・13）

とある通りです。私は医学部に医の倫理委員会がつくられて以来、委員長を勤めさせていただいて来ました。これまでに倫理委員会で審議された案件は、いずれも人のいのちの尊厳に深く関わるものでした。倫理委員会では何が正しいか、正しくないか、どこまでならやって良いか、どこまでなら許されるかを判断することが求められます。しかし、不完全な人間である私にどうして間違いのない判断ができるでしょうか。私はいつも神に、「私には判断できません。どうか私にあなたのみこころを示してください」と祈って委員会に臨んで来ました。主なる神は私の祈りを聞いてくださって、その都度聖書のことばを通して正しい道を指示してくださいました。したがって私はただこの神に信頼し、聞き従うだけでよかったのです。

これまで私たちは、人のいのちの問題をはじめ、医学・医療に携わる者にとって日常深

い関わりのあるいろいろの問題について、神のことばである聖書を通して光を当てて考えて来ました。人のいのちが尊いということに反対する人はだれもいないでしょう。しかし、現実にはそのいのちの尊厳性が守られていないのはなぜでしょうか。そのわけは、人のいのちのほんとうの意味を知らないからです。人のいのちが尊いわけは、私たちが創造者にして主権者の神を認め、その神の前に自分の高慢を捨ててへりくだった時に初めてわかるのです。

聖書に

主を恐れることは、知恵の初め。これを行なう人はみな、良い明察を得る。

（詩篇111・10）

とあります。創造者であり、主権者である神をほんとうに知れば、人間は恐れざるを得ません。そして、私たち医学・医療に携わる者が、主なる神を恐れた時、神から与えられた知恵によって、人の知恵では判断できない、いのちの尊厳に関わる診療上、研究上の諸問題に対する正しい明察を得ることができるのです。医学・医療に携わる私たちに対する『若き日に汝の造り主を覚えよ』ということばの意味も、まさにそこにあるのであり、医の倫理の原点もまた、ここにあると信じる次第です。

■著者略歴■

重田　定義

1927年東京で生まれる

1950年慶応義塾大学医学専門部卒業

1967年慶応義塾大学助教授（医学部・衛生学公衆衛生学）

1974年東海大学教授（医学部・衛生学）

現在東海大学名誉教授　医学博士

著書（福音関係）

『私たちの国籍は天にあります』（やさしい聖書の福音メッセージ集）

『みことばは食べるもの』（福音メッセージ集）

『仮の住まいと永遠の住まい』（福音メッセージ集）

『私たちはキリストに会った』（わかりやすい福音メッセージⅢ）一粒社

『新しい天地と古い天地』（福音メッセージ集）

『何を求めて生きるか』（福音メッセージ集）

本文中の聖句は、日本聖書刊行会「新改訳聖書」から引用しています。

医者に治せない病気　定価450円（本体429円＋税）

1996年6月15日　初版発行

2001年8月30日　第5刷

著　者　重田定義

発行者　重田定義

〒167-0033　東京都杉並区清水2-8-12

印刷・製本　新生宣教団

医者に治せない病気

定価 450円 （本体429円）